靖國神社境内の満開の桜

会報 特攻

令和２年５月

第１３０号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・理事長　藤田幸生　2
第四十一回特攻隊全戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　3
会員等投稿
海上挺進第10戦隊及び基地第10大隊・・・・・・・・元隊員　中溝二郎　5
海上挺進第11戦隊及び基地第11大隊・・・・・・・・元隊員　小島少尉　8
地獄よりの生還・・・・・・・・・挺進第11戦隊群長　橋爪藤雄　11
海上挺進第12戦隊及び基地第12大隊・・・・・・・・元隊員　中溝二郎　16
ルソン島転戦の記・・・・・・・・・・・・・・・元隊員　林　善信　20
海上挺進第13戦隊及び基地第13大隊・・・・・・・・元隊員　中溝二郎　23
私の戦時記録・・・・・・・・・・・・・・・・元隊員　上野克喜　25
記録にみる陸軍航空特攻と通信・・・・・・・・・・・会員　大槻健二　35
神雷部隊と第14期海軍飛行専修予備学生・・・・・水交会　小田部哲哉　43
旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所跡・・・会員　青木和子　49
連載　山ある記10・・・・・・・・・・・・・・会員　池田康博　51
アニメイラスト・・・・・・・・・・・・・・・会員　羽鳥ぴよこ　52
舞台『未来へつむぐ』を観劇して・・・・・・・・評議員　原　知崇　53
文芸欄　歌俳柳の広場
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・54
事務局からの報告等
平成31年度事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・55
新型コロナウイルスによる慰霊祭等影響について・・・58
各地の慰霊祭の修正・・・・・・・・・・・・・・・58
会報『特攻』第129号正誤表・・・・・・・・・・・・58
寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・58
挿絵提供空自ＯＢ　宇山氏

「巻頭言」

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　藤田幸生

会員の皆様、こんにちは！　お変り無くお過ごしでしょうか？

今年で、戦後、３四半世紀が、経過しました。この間、我が国を取り巻く環境は、著しく変化してまいりました。そんな状況の中でも、今年は、特に「特異」な年になりました。

それは、なんと言っても、中国武漢市で発生した新型肺炎が、世界に蔓延したことであります。４月８日には、東京はじめ、七つの都府県に「緊急事態宣言」が、出されました。この５月号が、会員の皆様方のお手元に届く頃には、この事態が、今後、更に進展し、全人類の営みに対して、どのように影響を及ぼしてくるかは、計り知れない状況にあります。

既に、「東京オリンピック」は、延期されました。新型肺炎の流行が、何とか終息の方向に、向かってくれることを祈るばかりです。

世界の経済活動はじめ、殆どの諸活動が、すでに、停止状態になっています。新型コロナウイルスへの対応状況で、世界各国の各種実情が、白日の前に曝され、明らかになってきました。それらは、各国民の生活レベル、教育知的レベル、道徳観念、国家体制の相違等であります。

各国の気候、風土、生活、文化、衛生観念等、生活のあらゆる方面からの国情が、明らかになってきました。今は、それらの優劣を、とやかく評価している時ではありません。そんな暇も、ありません。

昔、「宇宙と地球との戦争があれば、地球上の人類が一つにまとまり、地球に平和が生まれてくるのではないか？」と、思ったことがあります。「新型肺炎ウイルス」との戦いの現状は、将に、この「宇宙戦争」の様相に、見えてまいります。

私は、この（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会の活動に参加するようになって以来、ご縁があって、特攻劇「流れる雲よ」（旧「飛行機雲」劇団「サンデイ」）の応援を、十五年以上、続けてまいりました。その台詞の中に、主役の一人が、「今、日本は、良い国ですか？」という、変わらない台詞があります。

私は今、改めて、この言葉を噛み締めております。この度の、人類の禍い「新型肺炎ウイルス禍」を乗り越えた暁には、ご英霊の皆様に、胸をはって、「はい！良い国です！」といえるように、なっているのではないでしょうか？そのようになるべく、努力していきたいものです。しかし残念ながら、現状は、まだ、国家単位の覇権争いが、続いているようです！

そこで、もう一度言います。人類と、この新形肺炎との戦いは、「宇宙戦争」です。この、新型肺炎が、終息し、人類が、この戦いに勝った暁には、「人類社会が、一つにまとまり、理解し合い、譲り合い、助け合って、平和、平穏、平等な営みが出来る世界」が、実現していて欲しいものです。その時初めて、特攻隊戦没者の御霊が、安らかにお眠りいただけるものと、信じております。

今回の、世界各国の多大な犠牲者にも、言い訳が立つかも知れません。

その日のために、皆さんで、頑張りましょう！　（以上）

第41回特攻隊全戦没者慰霊祭

編集長　金子　敬志

令和２年３月28日（土）に靖國神社において斎行する予定であった第41回特攻隊全戦没者慰霊祭は、新型コロナウイルス発生に伴う、内閣府からの要請による参集者の安全を考慮し、例年通りの斎行を取りやめ、顕彰会役員等による代表参拝に変更して斎行されました。

慰霊祭行事は次のとおりです。

一　玉ぐし料等の奉納

「第41回特攻隊全戦没者慰霊祭参列予定者一同」として藤田理事長より山口宮司へ奉納

二　式次第

（１）拝殿

修祓

（２）本殿

ア　祭文奏上（理事長）

イ　玉串奉奠

昇殿参拝に先立って参集殿控え室において会員の皆様からの玉ぐし料及び懇親会費を靖國神社山口宮司にお渡ししました。この後、式次第に従い、昇殿参拝を行い哀悼の誠をご英霊に捧げました。終了後、参加者は遊就館前の特攻勇士之像に手を合わせた後、記念撮影をして解散しました。

祭文

謹んで在天の英霊に申し上げます。

皆さんが祖国日本のために尊い命をささげられたのは昭和の時代でした。それから70有余年、平成を過ぎ、昨年「令和」の御代を迎えました。この間、日本は平和な時代を過ごすことができました。

今年はあの戦いが終わって75年目を迎えます。「あの戦い」と言うのが「大東亜戦争」を指すことが、将来にわたって続くことを願うものです。なぜならそれが、日本が引き続き戦火にまみえることが無いことを意味するからです。

近く日本で戦後２回目のオリンピックが開催されます。戦後の自虐史観にとらわれ、日本のすべてを批判し、それがあたかも正義であるかのような風潮が蔓延する中、「今の若い者でこれからの日本は大丈夫か」と言う年寄りも多いですが、スポーツを見ていて、若い選手が日本を代表し、日の丸を掲げ、大きな声で君が代を歌う姿を見ると、今の若者にも、意識の根底には日本を想う気持ちがあり、むしろ日本の将来は明るいのではと思えてきます。皆様が示された日本人の精神は、脈々と受け継がれていると思います。

皆様は、祖国日本の不滅と最後の勝利を確信し、より良い日本を建設すべく、国家国民のために一身を捧げられました。皆様の示されたこの精神こそ、常に国を護り、国を興す底力であり、身を以て範を示されたものと信じてやみません。

私たちは、これからもご英霊の皆様の志を守り、粉骨砕身、ますます努力し、日本の発展と文化の継承に努める所存です。どうか在天の英霊、安らかに鎮まりますとともに、私共に一層のお力を賜らんことをこいねがう次第です。

令和２年３月28日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　藤田幸生

藤田理事長より山口宮司へ玉ぐし料等を奉納

参集殿前の案内掲示板

満開の標本木

拝殿に向かう参列者

遊就館前の特攻勇士之像

お祓いを受ける参列者

第一〇戦隊及び基地第一〇大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一〇戦隊は、暁（比島では威）第一六七八六部隊と称し、昭和十九年八月から豊島で舟艇訓練に入ったが、正式には九月四日宇品で編成され、陸士五一期の菅原久一少佐を戦隊長とし、第一中隊長重谷辰己少尉、第二中隊長杉浦晋三少尉、第三中隊長氷室正実少尉（何れも陸士五七期）、本部付将校（または副官）として小笠原栄松少尉（幹候八期十九年十一月中尉）がおり、群長は何れも豊浜の船舶幹候隊出身一〇期の見習士官（二〇年一月少尉）、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

戦隊は九月八日に、輸送船室蘭丸（本部及び第一中隊の一部と整備中隊が乗船）、大郁丸（第三中隊が乗船）、摩耶山丸（第一、二中隊が乗船、ただし門司港で乗替えた）に分乗し、十八隻の船団で宇品を出航し、途中台湾の高雄港に寄港した。

ここで菅原戦隊長は、飛行機で比島に先発し、次いで先発の船団（室蘭丸、大郁丸）は九月二十五日に高雄港を出航し、二十八日リンガエン湾のサンフェルナンド港に寄港、十月一日バターン半島のカブカーペンにて揚陸、二日後コレヒドール島に移動した。第二中隊の乗船したマカッサ丸は、バシー海峡で米潜水艦の魚雷を受けて撃沈され、積載してあった舟艇三〇隻は全部海没した。人員は幸いに全員救助され、マニラを経由し、本隊に遅れてコレヒドール島に着いた。なお、この間の日付は明確でない。

爾後、マニラ港に到着した輸送船に積載されていたⓁ舟艇の大部分は、コレヒドール島に集積、再配分されたようである。

ここで約一ヶ月は基地第一〇大隊の整備中隊とともに、舟艇整備と訓練に従事していた。当初の計画では、戦隊はホロ島に配備されることになっていたため、その指示を待っていたところ、十一月になり急拠基地を東部のラモン湾地区と決定されたので、十一月七日舟艇機動でマニラ湾を横断し、（途中三名（内田、平田、平野）の不明者を出し、海没と認定された。戦死日付は戦隊全員がトンゴヒンに到着し、漂流、漂着等の捜索を打ち切った日付の十一月十七日となっている）

ラグナ湖からマニラ市南部を流れるパシッグ河を遡り、マッキンレー兵舎附近で、第九戦隊の一部とともに、第一四方面軍司令官の山下大将から激励の訓示を受けた。

このあと一部は舟艇でラグナ湖を横断してマビタックに揚陸、大部分はトラックによる陸上輸送により、任務地であるラモン湾北端のトンゴヒンに展開、舟艇はリアール河の河岸に繋留秘匿し、十二月には全員の展開を完了した。

以後同地で訓練を行なっていたが、多湿地帯のため舟艇の腐蝕が多く、可動舟艇は半数程度に減少した。

二十年一月下旬基地第一〇大隊は、整備中隊だけを残置し、大隊の主力のほとんどが振武集団に属し、マニラの東部山地方面へ防衛戦備のため移動を行なった。又、第七戦隊の基地大隊も同様にマニラ東方地区防衛に転用されることになったので、マウバン地区に展開していた第七、第八（一コ中隊）戦隊は、振武集団長の命により基地から撤退して北上し、第一〇戦隊と合流することになり、一月末第一〇戦隊員艇の先導により海路トンゴヒンに到着した。

三月下旬、第七戦隊長内田大尉が指揮し、第七戦隊、第八戦隊の一部、第一〇戦隊（一コ中隊）の混合編成で舟艇に分乗し、ラグナ湖を横断してマニラ市南部のニコラスフィールドに斬込みを図ることに決した。（振武集団長の命があったかどうかは不明）

四月二日迄に舟艇を陸路にてラグナ湖東北岸のマビタックに輸送、四日夜陰舟

艇を発進させ湖を横断して五日パシッグ附近に達したが、上陸直前に陸岸のゲリラ隊に発見され、全滅状態となる被害を受け、第一〇戦隊では第三中隊長氷室小尉以下二十七名（生存者は一名といわれる）が、湖岸で戦死するに至った。

なお、この計画には当初第一中隊（中隊長重谷辰己少尉）が担当することになっていたが、同隊がテグノアンにおいて準備中爆薬の暴発事故があり、石井群長以下六名が死亡したため、人員不足となり急遽第三中隊に変更された経緯がある。

又、戦隊の舟艇行動としては、四月十日頃小笠原中尉以下五名が夜間にポリリオ島のゲリラを攻撃する目的で、軽機と擲弾筒を舟艇に積み込み、島に接岸した後、海岸でたき火をしていた一団に軽機と擲弾筒を乱射して帰還した。

次に五月六日に杉浦少尉以下三名が沿岸に接近する米軍の小型艦艇（海防艦と思われる）に対し、舟艇攻撃を行なったが、戦果を挙げ得ないまま出撃者三名は海上で戦死した。

（この海上戦死者は、出撃命令の系統が必ずしも明確でなかったためか、方面軍司令部の確認はされず、従って特攻戦死扱いにはされていない。）

その後、本隊は使用可能な残存艇を焼却し、専ら陸上戦闘に入る態勢をとったが、この頃には残っていた整備中隊もマニラ東方の山岳陣地に移動を開始したので、この地区の先任者菅原少佐は集隊長として、第七、第八（いずれも残留者）、第九、第一〇戦隊を掌握し、集隊としての陸上戦闘態勢を固めた。

五月十五日頃、サランバトの木暮支隊守備陣地を突破した米軍は、テグノアンを経由、海上からの砲艦等による掩護のもとにリアールに進攻して来た。

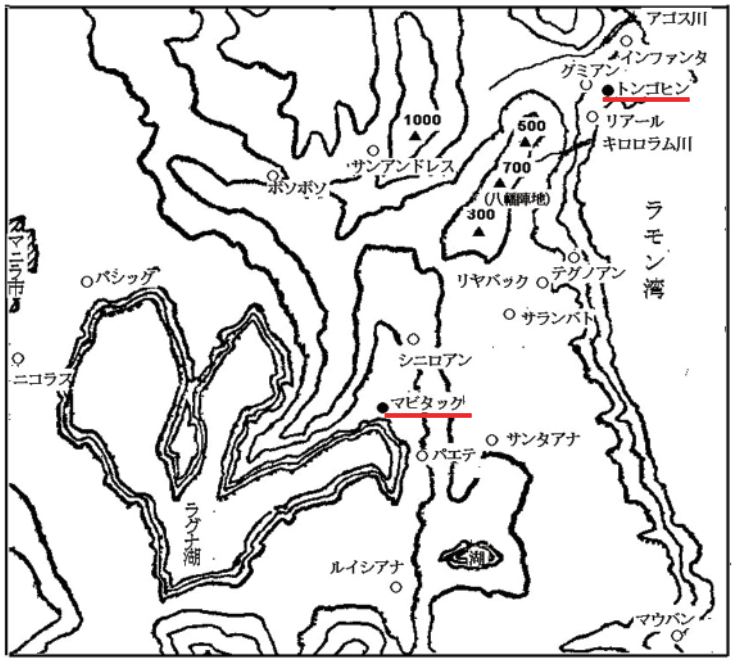
戦隊は第七、八、九戦隊及び基地隊の残留者、ボソボソ方面から撤収してきた若干の部隊とともに脊梁の七〇〇高地（通称八幡陣地）を基地としてキロロラム川を挟んでの戦闘となった。この間の戦闘で小笠原中尉、重谷少尉ほか戦隊員一名及び、結木中尉（事務副官）等数名が戦死した。

米軍がリアールを占拠してからも、数度にわたって斬込隊を組織し攻撃を行なった。

特に五月下旬以後、リアールで三回に及ぶ戦闘を行ない、第一次の斬込で本部付の吹野少尉以下数名が戦死、第二次の戦闘では米兵に多数の被害を与えたほか、兵器、食糧等多数を鹵獲したが、七月二十日の第三次のリアール大橋の戦闘では、第二中隊の木村少尉以下数名（第九戦隊を含む）が戦死する激戦が行なわれた。

六月に入って食料が欠乏したため、八幡陣地を出てリアール附近のキロロラム川上流地域に移動し、自活を行ないながら逐次戦闘を行なった。

又、六月初旬には杉浦隊の武生少尉以下三十名、九戦隊より十数名が約一ヶ月の予定で、アゴス川上流脊梁山脈を越え



て振武集団本部に兵器受領のため出発した。七月末になって武生少尉以下一〇戦隊の者はアゴス河上流にて一名死亡の他残員は帰任したが、（振武集団には接触できず）九戦隊から参加した者は一名を除いて他の者は未帰還となった。（原因ならびに生死不明）

八月上旬一部隊員は第九戦隊の主力とともに、十数日かかって脊梁山地の密林地帯を横断し、八月下旬ラグナ湖を望見するパエテ東方山地（サンタアナ）にて木暮支隊本部と合流、既に戦争終結の情報はあったが、木暮支隊長と共に尚南下を続けルイシアナ東方高地迄達し、同地区で戦闘待機、九月に至って停戦した。

残余の隊員は第七戦隊斎藤大尉の指揮下にあって前記キロロラム川上流地帯で自活しながらゲリラ部隊との戦闘を繰り返していたようであるが、この地区からの生還者がいないため詳細は不明である。

こうした戦闘により、同隊の被害情況は、将校十四名、隊員八十一名の合計九十五名の戦死に達した。

海上挺進基地第一〇大隊は、暁第一六七九七部隊と称し、昭和十九年八月二十九日伊藤勝八郎大尉を大隊長として編成され、中隊長には住江智隆中尉、小隊長として横田太三郎少尉等がいた。

九月九日に門司を出航したが、本部（ただし大隊長は先行して、当初の予定地とされたホロ島に渡っていたが、方面軍の基地変更の決定により十月中旬マニラに帰着した。）及び第一中隊の乗船した千早丸は、同月十日に、はやくも巨文島の沖合で米潜水艦の魚雷を受けて沈没、遭難者は朝鮮の麗水に上陸し、九月十八日に同地を出発して二十一日に宇品に帰り着き、十月六日に再編成を行なって大捷丸に乗船、再び門司を出航して高雄を経由、十一月一日にマニラに着いた。

一方第二中隊の乗った大敏丸は、無事に十月十日マニラに着いた。

第三中隊の乗船した阿里山丸は、同じく無事に十月五日にマニラに着いたが、ここで南山会丸に乗替え大隊長の先行しているホロ島に向うべく、同船は十月十日にセブに回航したが、ホロ島配備は取止めとなり、十月末に東部のラモン湾地区と決定されたので、十二月八日に至って再びマニラに帰着、上陸して本隊に合流した。

また整備中隊は、室蘭丸、マニラ丸、マカッサ丸に分乗して、それぞれ九月十一日高雄に着いたが、船団編成が遅れ、十月一日になって高雄を発ち、十日にコレヒドール島に着いた。ここで戦隊とともに舟艇整備に従事していたが、十二月に入ってマニラに移動し、ようやく大隊は全員の集結を終った。

大隊は集結完了後、十二月三日に東部海岸のトンゴヒン地区に移動し、同地区で舟艇秘匿と宿営基地の設営に従事したが、二十年一月中旬になると、大隊主力はマニラ東方の山岳陣地防衛の目的で振武集団に編入の命令を受けて北上した。

この後しばらくトンゴヒンに残留していた整備中隊も、四月四日にマビタックに米軍が進出してきたため、木暮支隊長の直轄とされ、サランバト峠に移動することになった。

そしてマビタックから更にシニロアンと進攻してきた米軍に対し、第九大隊の第一中隊長吉田文治大尉が指揮し、川島、豊田、住江の各隊とともに、約一ヶ月間戦闘を行なったが、五月八日総攻撃を行なうとの通信の後、連絡が絶えた。

又、大隊主力は、ラグナ湖畔のハシー、ボソボソ、サンアンドレス、バンモロ等の各地で、米軍及びゲリラ隊を相手に転戦し、この間多くの戦死者を出し、八月中旬には一部はサンタアナ付近に配置していたが、ここで敗戦を知り停戦した。

同隊は総員一〇三六名中、九七八名が戦死し、生還者は五十八名に過ぎないといわれている。

第一一戦隊及び基地第一一大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一一戦隊は、昭和十九年十月一日付で、通称暁（比島では威）第一九七五〇部隊として、戦隊長は陸士五二期の多田清二大尉（十二月少佐に進級）、第一中隊長近藤篤男少尉、第二中隊長河村篤雄少尉、第三中隊長内村哲士少尉（いずれも陸士五七期）で編成され、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一一期の見習士官、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

なお本部付として幹候一〇期の高田武治見習士官（二〇年一月少尉）がいたが、十九年末にコレヒドール島にて大発の舟艇事故により脚を負傷したため、内地送還となり、後に第三次編成の第四六戦隊に入った。

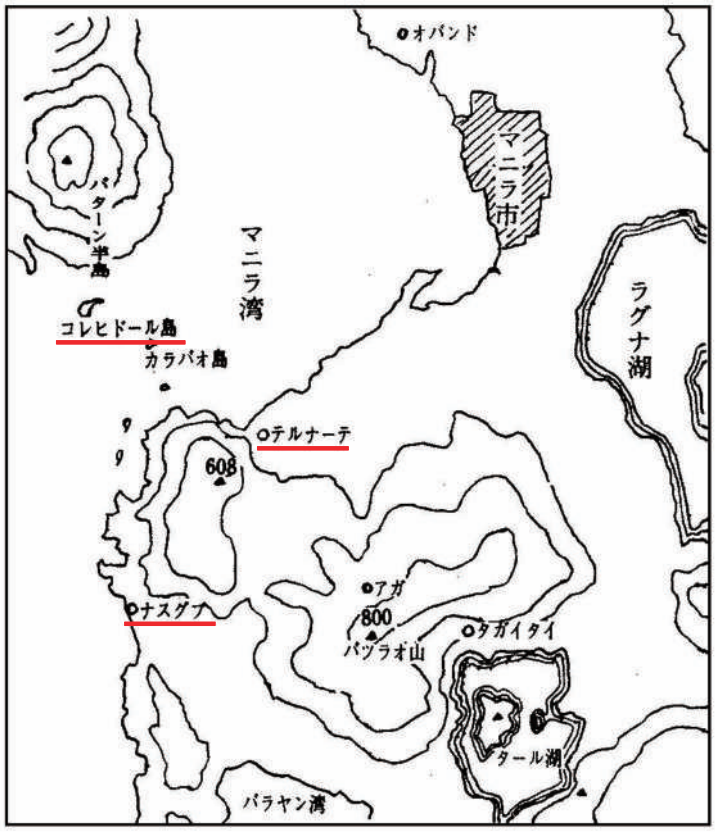
戦隊は、三隻の輸送船に分乗し、十月三日に、戦隊本部と第一中隊及び第二中隊の各一部が金華山丸に乗船、先発として宇品を出航し、次いで五日に第二、第三中隊の各一部乗船の輸送船泰洋丸と、第三中隊の一部乗船の一隻（船名不詳）が出航したが、泰洋丸が十月二十六日ルソン島サンフエルナンド沖にて雷撃を受けて沈没し、第二中隊長河村少尉以下二十六名の海没戦死者を出した。他の一隻もマニラ沖にて撃沈されたが、全員救助された。

生存者は翌二十七日マニラに到着し、直ちに残った舟艇をコレヒドール島に曳航して、一時展開、舟艇の整備・訓練を行っていた。（コレヒドール島にはⓁ及び海軍の震洋の修理施設がおかれていた）

十一月に入って、任務地に予定されているルソン島の、最南東部アルバイ州レガスピー付近（レイテ島に近い所）に展開の内命を受けたが、爆撃の被害激しく、鉄道・道路共交通遮断され、海上輸送も不能のため中止された。

その後、更にバタンガスに展開の命令が出され、本部は陸路バタンガスに先行して展開を予定したが、また命令が変更され、最終的にはマニラ市の南方テルナーテの南を流れるテルナーテ河岸に基地決定され、ここに配備の命令が出された。

このため十二月二十三日から二十五日にかけ、コレヒドール島から舟艇全部をテルナーテに向け機帆船で曳航して移動した。この航行中に、米軍機ロッキードの銃撃を受け、二十三日には隊員六名がマニラ湾上で戦死した。（他に一名重傷入院後戦死、二名は負傷入院、その後原隊に復帰せず、昭二〇、六、一二　マウンテン州キャンガン戦死となっている）



以後テルナーテ基地の防衛にあたっていたが、この間米ロッキード機による反復地上掃射を受けた事もあったが、爆雷等に被害はなかった。

二月中旬米軍は砲兵・戦車の支援を受けてテルナーテ河右岸より攻撃を開始してきたので、基地隊と共にこれに応戦する。

又、コレヒドール島攻撃中の敵駆逐艦より、艦砲をもって終日砲撃される事もあり、舟艇の一部を破壊されたが、大損害にはならなかった。

この頃、一月三十一日にナスグブに上陸した米軍とテルナーテ南方でも戦闘となり、引続きナスグブへの増派する気配があった。　ナスグブ港に敵船（輸送船三～四隻）が昼間揚陸中の状況が六〇八高地より望見できた。（但し夜間は存在が確認できない）

このため、取り敢えず一コ中隊をもってマニラ湾口の敵の警戒網を突破し、ナスグブ港の敵船を攻撃することとした。

二月二十一日夜、第一中隊長近藤篤男少尉が第二中隊の第三群及び第一中隊の第二群を引連れ、一〇隻の舟艇でナスグブ沖に船団攻撃のため出撃したが、戦果確認できぬままに終り、出撃者は三月上旬になって、近藤少尉以下六名だけが生還した。この報告によれば、攻撃時（夜間）ナスグブ港及びその周辺に敵艦船なく攻撃不成功であった。おそらく「リンガエン」湾での我が第一二戦隊の攻撃戦果に鑑み、夜間の揚陸を中止して沖合に移動するよう揚陸方法を変えたものと思われた。

この間の海上戦死者は八名（別記録では十一名）であるが、特攻出撃特進の措置をとられていない。

ナスグブ港攻撃後、間もなくテルナーテ基地では米陸上部隊が新たに戦車の支援を受け、総攻撃してきた。予め道路各所に敷設した爆雷等をもって阻止する等、数日間戦闘が行われたが遂にテルナーテ河右岸より撤収し、秘匿の残存舟艇は基地隊により爆破。これより戦隊は基地隊と共に専ら陸戦に移行し、本隊はテルナーテ河左岸の南部奥地にある六〇八高地に基地を移動した。

又、多田戦隊長は先任で、且つ土井基地大隊長は輜重兵出身であるため、戦闘要領不案内とのことで要請により、多田戦隊長が陸戦全般の指揮をとることになった。

尚、第七戦隊第一中隊第三群、第二中隊第三群〔群長大和田源蔵及び鍋倉義高（いずれも幹候一〇期）〕以下の隊員十七名が、十二月十一日にマニラに着いたが、比島到着後連絡不十分のため、本隊に合流できず、この戦隊に転属を命ぜられ一月末戦隊に合流戦隊長の指揮下に入った。

テルナーテ河左岸においても、米軍の砲撃熾烈で、陣地隠蔽のため有効であった樹木が殆どが無くなり、散兵壕は露出、又は埋まり、基地隊戦死者は続出し、主要な第一線陣地も殆ど占領される状況となった。

この頽勢を挽回するため、三月十日テルナーテ地区の主力を以てテルナーテ河を渡り夜襲を以て敵砲兵陣地を破壊することに決まった。

戦隊では第三中隊長内村少尉が斬込み隊長となり、（転属になっていた第七戦隊の大和田少尉以下を含む）又、基地隊は第三中隊、第二中隊の大部分とともに、テルナーテ河に秘匿してあった折りたたみ舟艇一隻で渡河し、対岸の米軍陣地に斬込みを敢行した。

内村中隊、基地第三中隊の順にテルナーテ河を渡り、敵第一線を突破して橋頭堡を確保、続いて第二線に肉薄したが、敵第二線は鉄条網を張り巡らし、且つ機関銃で掃射、前進極めて困難であったが、内村中隊はこれを突破して敵陣地深く突

入した。

敵の応戦下での折りたたみ舟艇一隻による渡河は、極めて時間を要し、遂に薄明に及んでも全軍が渡りきれなかった。これ以上渡河を強行すれば昼間の全面戦争となり、我が軍は川を挟んで二分される形となり、場合によっては全滅もあり得ると判断されたので、既に渡河している内村隊及び基地第三中隊に攻撃を中止し、撤退することを命ぜられた。基地第三中隊等は攻撃を中止し、舟艇により撤退を完了したが、内村中隊は既に敵中深く突入し、命令が伝達できなかった。

この夜襲の一、三日後、戦隊帰還者（テルナーテ河河口付近の干潮時に徒渉可能な所より帰還）の報告によれば、暗夜のうちに敵砲兵陣地及び幕舎に突入し、手榴弾を投擲し、又、砲数門を破壊した。（終戦による降伏後、収容所での米軍将校の話によれば、この日の夜襲で「テルナーテ」正面の最高指揮官の某准将が戦死したと云われている。）

この夜襲により戦隊では内村少尉以下十五名が、また第七戦隊員は十一名が戦死し、基地隊も第三中隊長以下戦死者と重傷者を出した。

その後三、四日は敵砲火は下火であったが、それ以降は旧の如く激しい砲火に晒される事になった。又、ナスグブ方向よりも攻撃を受け、基地隊、戦隊はこれと応戦しつつ逐次六〇八高地に集結した。

その後マニラ湾中のカラバオ島から撤退して、南下して来た海軍の砲台守備部隊の中村大尉、渡辺中尉指揮の隊と、ほかに野戦重砲中隊、第一七連隊から派遣されていた小隊を含む四コ部隊の合計五〇〇名が加わり、戦隊長が集団の長となって、六〇八高地に展開し、此処を拠点として同地の防衛戦闘に当たっていた。

四月十九日に至り、予め受けていた軍司令部からの命令により、六〇八高地を出てマニラ東方のモンタルバンに向うこととなり、転進経路を六〇八高地より「マニラ～ナスグブ」街道のアガ附近を経過、タール湖よりマニラ東方高地のルートで目的地モンタルバンに達するよう、携行食糧等の準備を完了して行動を開始した。出発にあたり、部隊と共に行動する体力のないもの七名が、希望により六〇八高地に残留した。

転進途中では、四囲全て敵のため、昼間は米軍（ゲリラ）と交戦、夜間に前進を繰り返し難渋を極めたが、五月一日にアガ付近に到着した。

此処で、「マニラ～ナスグブ」街道を突破する必要があったが、この地区では既に二月上旬にタガイタイを中心に降下していた米軍のパラシュート部隊（空挺一一師団）と遭遇することとなり、五月一日から四、五日にかけてこれと戦闘になり、戦隊は川崎群長をはじめ七名、第七戦隊員は鍋倉少尉以下三名の戦死、基地隊も多数の戦死者を出し、第二中隊は全滅の状態となった。

又、「マニラ～ナスグブ」街道突破の際、米軍の攻撃を受け、第一中隊と基地第一中隊は本隊と分断され、爾後、それぞれ別の行動をとらざるを得ないようになった。

本隊は五月九日にはタール湖西岸地区に達したが、時は雨季にかかり行進に困難となったうえ、米軍からの攻撃が逐次激烈になったため、目的地モンタルバンへの迂回転進は不能となった。

このためナスグブ東方十五キロ、タール湖の西方の通称八〇〇高地（バツラオ山？）に守備陣地を設営し、ここでゲリラとの戦闘を繰返すかたわら、食糧確保に努めていた。

又、六月初めには先に分断されていた隊も本隊に復帰し、屡々ナスグブ街道に出撃して米軍の輸送路を遮断する等、比較的志気を保持していたが、ここで九月十七日軍使を迎えて敗戦を知った。

同戦隊の被害は　将校十一名、隊員八〇名、ほかに戦隊付下士官二名の戦死があり　合計九三名の戦死者を出した。

又、第七戦隊より転属してきた鍋倉群長以下十六名が戦死した。

（大和田少尉一名生還）

海上挺進基地第一一大隊は、通称暁第一四二〇八部隊と称し、少尉候補者一七期の戸井半之助少佐を大隊長とし、中隊長には荒木一二中尉、勝修三大尉等で、昭和十九年九月三日に東京赤坂の近衛歩兵第三連隊で編成を行ない、十月三日宇品を出航し、上海を経由した後、十月二十五日にマニラに到着した。

十二月二日予定された任務地であるレガスピーに移動し、同地で宿営基地の設定を行なっていたが、戦隊の基地がバタンガスに変更となったため、ここで改めて基地設営に当たった。レガスピーはサマール島やレイテ島に最も近いため、そのうちの一部はレイテ作戦に参加命令を受け、レイテ島での戦死者を出したといわれている。

しかし前記のように、戦隊は更に任務地変更の命令を受け、レガスピー、バタンガスにも展開してこなかったため、十二月二十日になって、急遽マニラ地区に帰ることになり、変更された勤務地であるテルナーテで、改めて陣地設営に当たった。

以後米軍上陸時までテルナーテ地区に戦隊とともに駐屯していたが、米軍のマニラからの逐次南下に伴い戦隊とともに地上戦闘に入り、三月十日のテルナーテ河を渡河しての斬込み戦では、第三中隊長重傷、その他多数の戦死者を出した。

その後、戦隊と共に六〇八高地を中心に米軍と交戦を続けていたが、戦隊が六〇八高地からマニラ東方のモンタルバンに向うこととなり、これとともに四月十九日からマニラ東方部を目指し同高地を出て南下し、戦隊と同じくタール湖の西方の通称八〇〇高地に守備陣地を設営し、ここでゲリラとの戦闘を繰返すかたわら、食糧確保に努めていたが、九月に終戦を迎えた。

しかし第二中隊は五月上旬に、アガ付近で米軍の空挺隊と遭遇し、この地区の戦闘で中隊のほとんどが全滅するに至った。

同大隊は総員九〇八名中、七九七名が戦死し、一一一名が生還した。

地獄よりの生還

海上挺進第十一戦隊群長（見士）

（幹候十一）橋爪　藤雄

私は昭和十八年十二月より昭和二十一年一月迄の二年有余の軍隊生活で、奇しくも二度フィリッピンに派遣され、天国と地獄の両極限を味わった。

昭和十七年七月米軍のガダルカナル上陸以降戦況一転し、南太平洋に於ける海空軍の大きな損失はあったものの昭和十八年の中頃迄は比島海域は日本の制空権、制海権は辛うじて維持されていた。

然るに僅か一年後の十九年十月、二度目の比島赴任の時には戦況全く異り、制空権、制海権を失った戦争の惨めさを体験し、多くの将兵中戦果を伴ふ華々しい戦死はむしろ少数であり、戦う事も出来ず、病死、海没、不慮の事故等で多数の貴重な生命が失われている。

●天国と地獄

昭和十八年十二月一日、船舶工兵として学徒出陣、広島の宇品に集結したところ、夏服を支給され、約一週間の旅館生活後に日焼けした下士官が我々を受領に来た。南方行きは覚悟したものの、沖縄か台湾あたりかと予想していた。然し高雄港を出港するに及んでフィリッピン行を覚悟した。

此の時の船舶護衛は駆逐艦二隻であり、米潜水艦と一回遭遇したが全く被害なく、無事マニラ経由でセブ島リロアンに到着した。

美しい海、椰子林に囲まれた白い砂浜、

南国特有のエキゾチックな環境に加え、マンゴ、パパイヤ、バナナ、パインアップル等果物は豊富であり、住民のピサイヤ族は、ルソンのタガログ族に比べ性格温和、親切で美人も多く、軍票のペソも未だ貨幣価値を有していた、

又軍規律及び訓練は野戦部隊のため内地ほど厳しくなく、A型パラチブスの蔓延と豚のスープに外米という食事のまずさを除けば、南国のパラダイスを楽しみ、約三ケ月間快適な初年兵教育を送ったが甲幹試験に合格して内地に帰り、豊浜の船舶幹部候補生隊に入隊した。

然し運悪くAパラにて入院し、幹候試験を受けられなかった約半数の同期生は乙幹として現地に残り、十九年十月以降レイテ作戦に加わり、更に米軍のセブ島上陸により、多数の犠牲者を出している。

●㋹に転属

昭和十九年四月、香川県の豊浜に入隊した頃より、戦況著しく悪化し、米豪軍のニューギニヤ上陸後、サイパン、グアム、テニアンの陥落により、七月以降愈々内地の空襲が始まり、私は区隊長伝令として、夜間の営外居住の自宅までの十キロ以上を走らされた。

その頃より区隊内で小型特攻舟艇が小豆島で訓練を行っているとの噂を耳にしていた。

八月初旬中隊長室に呼ばれ、区隊より三名の㋹への転属命令があった。十一期の場合㋹転属の人選は完全に一方的な命令であり（十二期では命令志願・抽籤等あった由）恐らく私の場合・毎晩点呼後営庭で行われた号令調整で区隊一、声が大きく、・体力頑健性格単純、・自動車運転免許所持・三男である等諸条件が適していたものと思われる。

此の時の心境はやはり来るものが来たかと云う程度で、特に選ばれたと云う誇りとか、死への恐怖と云う切迫したものはなかったが、後述の様な地獄の苦しみを味うとは、つゆ思わなかった。

第一次㋹群長（小隊長）転属者は第十一戦隊から二十戦隊までの十ケ戦隊の要員百名（一ケ戦隊十名）で全員豊浜十一期であり、各戦隊の任地はフィリッピンであり。（二十戦隊は台湾止まり）で二十一戦隊以下は前橋他各地予備士官学校よりの転属で、基地は沖縄、台湾に展開、三十一戦隊以降が十二期生と記憶している。

江田島（幸の浦）に着任し舟艇を見て驚いたのは、エンジンは海水に弱い電気系統の陸上トラックのガソリンエンジン、船体はベニヤ製で、補修の都度速力は落ち、この様な兵器で敵艦船に接近し爆雷を投下し得るのかが第一印象であった。

九月中旬、小豆島で訓練を終えた中隊長（陸士五七期）及び特幹兵と幸の浦で合流し、十月一日正式に十一戦隊が編成された。

私達は九月三十日見習士官に任官し、十月上旬に出港した。

前日に壮行会が行われたが、船舶司令官の挨拶は「最早我国では此の㋹舟艇と機帆船しか作れない。諸官宜しく死んでくれ」と云うもので、成功を祈ると云う言葉はなく、上層部も斯様な兵器での成功を期待していなかったと思われる。

●バシー海峡にての海没

昭和十九年十月初旬、十一戦隊は危険分散のため三船団に別れ、異るコースで比島に向け出港し、内主力（戦隊本部、一中隊、三中隊の二ヶ群）は中国近海を経て、無事マニラに到着、一隻（二中隊）はリンガエン沖で海没（全員戦死）私の船団（一ケ群のみ）は十月四日、輸送船十五隻と護衛艦は駆潜艇一隻のみの陣容で宇品港を出港した。途中高雄港空爆直後の惨状を目撃し、僅か一年の間に斯くも戦況が悪化したのに驚きつつ、船団はバシー海峡に進んだ。

此の頃は米潜水艦はレーダーで船団を

追うのではなく多数が海峡に待機しており、十五隻の内十三隻が撃沈轟沈され、数千名が海に散った。

当日は波高五メートル以上あり、私及び特幹兵十名は運よく浮遊していた筏に体を縛り、周辺に泳いでいる将兵二十名程を集め、波に体をまかせ、サメの襲来を避けエネルギーの消耗を防いだ。

南の海でも、三時間も経てば体が冷え睡魔が襲って来る。眠りそうな部下をなぐり、又歌を唄わせ、体力が限界に近づいた頃、駆潜艇よりロープが投げられた。駆逐艦とは異り、駆潜艇では収容人員が限られ、恐らく救助されたのは一割以下と思われる。

此の時見た地獄は、少数にて散乱した兵達が、肉体は殆ど死にかけ乍ら、最後の気力をふりしぼり、日の丸の旗を振り救助を求めたが、艇が通過すると共に、首を垂れていった。

斯くして裸一貫でマニラに上陸し、支給されたのは自決用の短銃のみであった。

●コレヒドール島の大爆発

十一戦隊は十九年十月下旬より、十二月末迄コレヒドールにて舟艇整備と訓練を行った。

此の島では、陸軍の㋹と同型の海軍の小型特攻舟艇「震洋」（略称㊃）が同居していた。

「震洋」の戦術は、陸軍の爆雷塔載ではなく、舳先に二五〇キロ爆薬を装填し、敵艦船の五〇メートル手前で舵を固定し、スイッチをオンに、艇より離れ、後刻、魚雷艇が収容すると云う戦術で、海岸近くに濠を掘り、舟艇を隠匿していた。

十二月下旬朝、震洋の整備ミスにより、艇が爆破し、五〇メートル以内の他舟艇に誘爆した。危険を察知し、隊員と共にオタマジャクシの尻尾に退避した直後（コレヒドール島はオタマジャクシの形をしている）、地下弾薬庫に引火し、島が二分する様な大爆発となり、夕刻兵舎に戻った処、周辺跡形もなく、何百名もの頭、手足が飛散していたが、瞬間の機転により、戦隊員及び㋹舟艇は無事であった。

十九年十月にレイテ海戦に向う武蔵を旗艦とする我国機動部隊の最後の姿を島から見送った。十二月にはマッカーサーよりレイテ戦終結の声明がありその後北上する米軍がマニラ湾かリンガエン湾の何れかに上陸を予測し、十一戦隊は当初パタンガスに基地設定予定を変更し、コレヒドール対岸のテルナーテに展開し、マニラ湾よりの敵上陸に備えた。

十二月中旬より下旬に掛けて、大半の舟艇を三～四回に分けてコレヒドールより、任地テルナーテに自力で移動し、一月四日残る舟艇十隻を機帆船で曳航中、ロッキードP38（双胴）九機に襲撃され、焼玉エンジンに隠れて機銃掃射を避けたが、機帆船及び六隻の舟艇は沈み、私の救命胴衣には二〇ミリ機関砲の貫通跡があり、神仏の加護によるものか奇跡的に一名の犠牲もなく残る四隻に分乗しテルナーテに着任した。

●コレヒドール島陥落

テルナーテ展開直後一月上旬、米主力艦隊に護衛された百隻以上の船団がマニラ湾西方を北上し、数日後リンガエン湾に上陸との情報を得た。此の時第十二戦隊が出撃し、相当の戦果をあげたが、比島に於ける㋹の戦果は此の最初の奇襲によるもののみであった。

上陸した米軍は、その機動力により数日後にはマニラ周辺迄南下し、二十年一月下旬にはマニラ市も陥落した。

時を同じくし、米艦隊によるコレヒドール及びカラパオ要塞の攻撃が開始された。

米艦隊のコレヒドール島攻撃を対岸より望見した。攻略要領は先ず米駆逐艦が島に接近し、艦砲にて砲撃し、我が要塞砲の応戦を待ち直ちに後退し、後方に控えている戦艦が要塞砲の位置を確認し、

要塞砲の射程外より砲撃する。

そして夕刻四時頃には、リンガエン湾の㋹の夜襲にこりてか砲撃中止し、㋹の航続距離外の西方、水平線の彼方に退避した。

約一週間繰り返し、砲撃、空爆により、日本軍の抵抗が弱まるのを待ち、落下傘部隊が降下した。

落下傘には赤黄白の三色があり、恐らく兵員武器、食糧等の区別と思われる。そして二日後に日本軍の抵抗が全くなくなった。

島に展開していた陸海軍の多くの将兵が、反撃も出来ず、多くの命を失った事であろう。

●陸の船舶兵

二十年二月中旬、マニラより南進する米陸軍は、師団砲兵の支援を得て、テルナーテ右岸に接近し、又マニラ湾の掃海を始めた米海軍に空軍も加わり、戦隊及び基地隊も右岸の民家より、左岸の沢又は壕に退却を余儀なくされた。

日中は絶えず米哨戒機が８の字を画き、地上の僅かな動きもキャッチし、一日数千発の陸海空の砲撃、爆撃で、被弾して、周辺の山容樹木は一日毎に改まったが、兵員、舟艇の被害は少なかった。

此の頃の心境は今夜こそ出撃か、出撃は死を覚悟せざるを得ず、毎日緊張し、出撃延期となると何とも云えぬ虚脱感に襲われた。

二月二十一日、ナスグブ港に敵艦船ありとの情報を得、比較的被害の少なかった一中隊の中隊長以下三ケ群が出撃したが、船影なく、米魚雷艇に阻まれ、戦果は全くなかった。

数日を出ずして、米軍は戦車の支援を得て、基地への総攻撃が開始されて、テルナーテ川本流に隠蔽した残る㋹艇及び爆雷を基地設定隊の手で爆破せざるを得なかった。

此の時より海上艇進隊は陸の特攻隊員となり、斬込隊の要員となった。

戦隊員は短銃しか所持しておらず、奇襲作戦以外なく、これに対し米兵は歩兵一人に至る迄自動小銃と無線機を持っており、時折前進してくる米兵をタコツボより射殺すれば、周辺の米兵が直ちに無線にて発砲位置を連絡し、数十秒後には数十発のロケット砲が落下し、更に後退を余儀なくされた。

日中の特攻としては、数度に亘り、刺突爆雷を抱え死を賭して敵戦車に突入したが、運よく命中しても、キャタピラ数枚の破損程度で、数分後には修理始動し、何とも軽き命を失った。

二十年三月十日陸軍記念日を期し、私の属する三中隊及び基地隊による米軍本部に対する夜間斬込みが決定し、愈々来たるべきものが来たと覚悟し、夕刻、あまりの暑さに壕より出た処、至近距離に重砲作裂し、同僚は即死、私は臀部に破片三発被弾し、出血多量で斬込みに参加出来なかった。

此の斬込みにより、米テルナーテ方面最高指揮官の準将が戦死等の戦果をあげたが、当方も中隊長以下十一戦隊員十二名、一部合流した七戦隊員十一名及び基地隊員多数が戦死した。

米軍資料にも比島戦線で米軍が苦戦した地域として、テルナーテをあげており、第十一戦隊が米軍との戦闘であげ得た唯一の戦果であった。

その後も夜間になれば、空に哨戒機はなく、重砲の弾着も固定しており、米兵と一対一ならば負けてはおらず、夕刻以後米軍は右岸に退却した。

●マラリヤ及び飢えとの斗い

四月に入り軍司令部より各部隊は各地に集結し、現地自活にて鋭気を養い、数年後の反攻に備える旨、指令があり、十一戦隊、基地隊に加え、カラバオ島の海軍部隊及びレイテにて撃沈された戦艦武蔵の生存乗組員等計千名程がテルナーテ

南方の六〇〇高地に集結し、タール湖西のモンタルバンを目指し、転進を開始した。此の時迄運よく生き永らえたものの、体力の限界にあった特幹数名が行動を共にする事が出来ず自決し、涙をのんで出発した。

昼間は米軍及び住民ゲリラと交戦し、夜間は星を頼りに移動を続けた。此の時は未だ若干の干飯、塩も所持しており、又部落通過時はバナナ、パパイヤ、キャスタバ（根芋）落花生、時には鶏等を食する事が出来たが、飲水に不自由し死体の浮いている沼の水で補った。

五月一日未明アガ附近のナスグブ街道横断時、米軍及び住民兵と遭遇、ロケット砲の集中攻撃を受け、集団が二分されると共に、各部隊は多くの犠牲者を出し、戦隊員は、十数名を数えるのみとなった。

五月下旬頃よりフィリッピンは雨期に入る。連日のスコール、米軍住民兵との戦斗に苦しみつつ南下を続けた。休息時は常に上空よりの遮蔽のため、沢等の低地に潜み、乾期には全く水のない沢が川となり、水に浸り乍ら幾晩か寝た事もあった。

此の頃より食糧全く尽き、体力の低下と共にマラリヤが多発した。勿論医薬品はなく、辛うじて、バツラオ山（八〇〇米の高地）の中腹に辿りついた。

六月以降、口に入る柔いものとして、バナナの幹の芯、雑草等で、主として朝顔（内地の昼顔）の葉を、火気を全く使えないため、その儘、食し、僅かでも塩分を求めた。塩分の欠乏を補うべく自分の小便まで飲んだが無駄であり、人間は塩のみあれば生きられる事を実感した。

又トカゲ、蛇、犬、鼠、猿等は貴重な蛋白源であり、ウジ以外動くものはすべて食した。

七月以降、マラリヤ、栄養失調、更には虫又は蚊の傷口より化膿し一晩にて脚部の肉がウジに食い荒される熱帯潰瘍等により動けなくなり、タレ流しの者が多くなった。

生きる苦しみより楽を求め、手榴弾を抱え、又は銃口を口にくわえ、自決する者が出始めた。

遠い他国で誰に見守られる事なく、戦わずして死を選び、さぞ無念であった事であろう。

そして日の丸の飛行機を見たかったと云うのが最後の言葉であった。

人間は極限に達すると死を選びたくなり、私も三度程、拳銃を口にくわえたが、何としても生き抜くと云う気力、生に対する強い愛着と僅かな責任感より引金を引くのを思いとどまった。

八月に入り、米哨戒機より、「広島、長崎に原爆投下」「日本ポツダム宣言受諾」「日本無条件降伏」等のビラが散布されたが全く信用しなかった。寧ろ八月十五日以降爆撃砲撃が全く止み、これで台湾より友軍が反攻に転じたと錯覚し、近々友軍機が見られる事と期待した。

●捕虜収容所へ

九月十六日、ナスグブ街道方向より、日本の陸軍大尉（陸士五三期）が米兵の護衛を伴って、白旗を掲げ、最前線の私の民家約一キロに到り停止した。瞬間比島派遣軍戦斗に勝てりと勇躍軍使と会見したが、軍使より「終戦の詔勅」及び「停戦命令」と至急降伏しなければ内地帰還船がなくなるとの伝達を受けた。

こと余りに重大で俄に信じる事が出来ず、戦隊及び基地隊各員と協議して一応停戦に応ずる事とし、翌夕指定されたタガイタイ附近にて武装解除を受けた。此の時に残った戦隊員は五名のみであった。

此処で検分したのは米軍の中でも戦斗部隊と兵站部隊又は将校と兵員の間には、能力、智力、胆力、マナー等に大きな差があることだ。豪雨の中、テント内で我々に温いコーヒーを出し、自らはずぶ濡れになりながら、住民ゲリラより我々を護

衛してくれていた。

翌朝トラックにてマニラ郊外ビビリット収容所に到着し、数千人を超す日本軍将兵が収容されているのに驚かされた。

そして我々将校のキャンプの隣の将官級収容所に山下司令官の姿を見た時に日本の敗戦を確信した。

此処でＰ・Ｗ（プリズナー、オブ・ワー）の印刷された米軍服を支給され、久し振りにテントで体を横たえる事が出来たが、食事の量の少なさに苦しんだ。

米国は日本と異り、植民地政策上、現地より食糧、物質を調達せず、そのため毎日の食事はラードに数えられるぐらいの米粒が浮いているだけで、毎日空腹に苦しみ、尾籠な話であるが、大便は週一回程度、無理に指を突込み、うさぎの糞の様なコリコリしたものを引張り出した。

山中にての飢えとキャンプにての量の不足により、六五キロの私の体重が三五キロと自ら驚く程痩せ衰えた。

山下司令官より米軍に対し日本の将兵はアメリカに降伏したのではなく、天皇陛下の命令によるもので、捕虜に対し不自由をかけるなと強く要求した旨聞いていたが、米国とて、戦争で多くの船舶を失っており、本国よりの搬入では止むを得なかったのではないかと思う。

そしてキャンプにて驚いた事は、米軍情報網で、日本軍各部隊の編成、行動経路、人名等、殆ど把握しており、住民よりの訴えにより、周辺の部隊及び類似した氏名の者は戦犯の首実検に立たされた。

容疑は非戦斗員の殺戮が主であるが、民兵の多くは米軍庇護のもとに組織化されており、当方も自衛上止むを得ぬ場合もあり、毎日が針の筵に座している様で、死の危険はなくなったものの地獄に近い三ケ月間であった。斯くして十二月二十四日クリスマスに復員船がマニラを出港し、二十一年一月十日浦賀港に上陸した。富士山上空にグラマン機を見て再び敗戦を実感すると共に、地獄より解放された。

顧りみれば、我部隊の実態より、比島派遣軍の犠牲者は、直接の戦死二割、輸送途次海没者二割、マラリヤ、栄養失調等による戦病死が五割以上ではないかと推測される。

そして斯様な地獄より生還し得たのは、「体力」「幸運」もさること乍ら、何としても生き抜くと云う強い精神力によるものと思っている。

本年（平成十三年）五月下旬より十日間程、セブ島、ルソン島に慰霊の旅を続けたが、当時を回想し、物量、兵器の質、情報網に格段の差があるアメリカと戦端を開いた無謀さ故に、多くの将兵が、国を守るための意味ある死ではなく、戦う事も出来ず、何と軽き命として落した無念さを偲び、その冥福を祈ったのである。

第一二戦隊及び基地第一二大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一二戦隊は、昭和十九年十月一日付で幸ノ浦で編成され暁（比島では威）第一九七五一部隊と称した。

戦隊長は、陸士五四期の高橋功大尉で、第一中隊長は林基弘少尉、第二中隊長は田原弘吉少尉、第三中隊長は植村緑少尉（いずれも陸士五七期）、戦隊本部付将校（又は副官）として伊丹清見習士官（幹候一〇期　二〇年一月少尉）、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一一期の見習士官、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

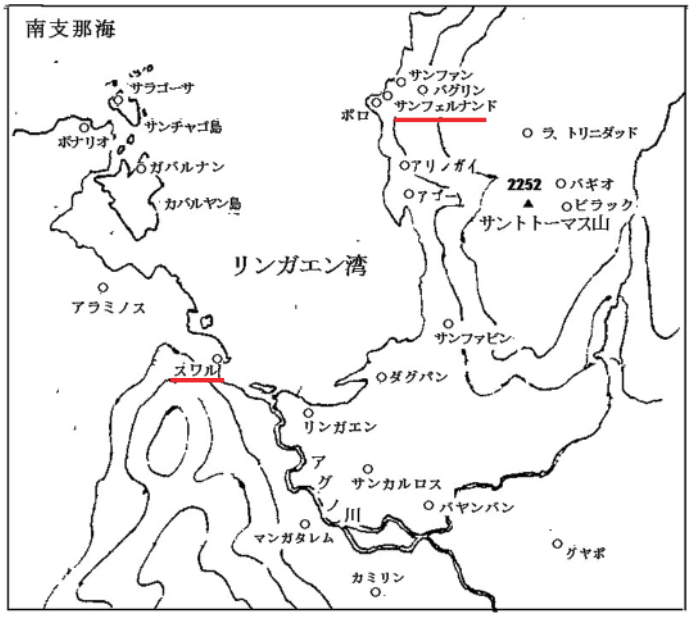
十月三日、戦隊本部と第一中隊は、能登丸で、第三中隊は高津丸に乗船して宇品を出発し、四日に門司を出て六日に上海の外港呉淞（ウースン）港に回航、ここで待機中の玉兵団（レイテ方面に派遣される第一師団の部隊名）の一部を乗船させた船団六隻は、十六日に出発二十五日にはサンフェルナンドに、二十七日には無事マニラに入港した。この船団は比

島増援の第一師団を無事現地に輸送するための優速船団であった。

第三中隊はサンフェルナンドにて下船、ここにて主力の到着を待った。

又、第一中隊はマニラ入港後直ちにコレヒドール島に向った。

又、第二中隊は一日遅れて四日に青木丸で出航し、途中台湾沖航空戦退避のため伊万里湾に仮泊した後、二十二日高雄に入港、二十三日に高雄港を出航した。この船団十三隻は、途中バシー海峡において米潜水艦の攻撃を受け、第十三戦隊及び第十四戦隊等の乗船していた大博丸（大彰丸？）及び泰洋丸等が被雷沈没したが、本船は無事切り抜け十月二十九日北サンフェルナンドに入港、積載していた㋟を揚陸したが、台風の襲来があり、舟艇が冠水する被害があった。



戦隊本部はマニラから陸路北上して北サンフェルナンドに到り、十月二十八日に第二中隊と合流、又、第一中隊も十一月十五日に至りコレヒドール島を出発して北サンフェルナンドに着き、ここに戦隊全部が集結し、リンガエン湾に面したポロ付近に展開した。

十一月中旬に、リンガエン湾地区の防備を担当する第二三師団（旭兵団と称した）長西山福太郎中将の指揮下に入ることとなった。

十二月十五日に、米軍艦上機の空襲を受け、戦隊にも負傷者数名を出した。

同月二十六日に、師団命令によって基地を変えることとなり、北サンフェルナンドから舟艇航行でリンガエン湾を横断し、対岸のスワルに基地を移動した。この移動に際して、舟艇二隻と人員若干を失う事故があったが、二十年一月四日までに全艇の配置を完了した。

この直後の一月六日には、米軍の上陸船団のリンガエン湾侵入と、これを援護する艦艇による艦砲射撃が開始され、これによる戦死者が続出する状態となり、七日より九日迄の間に伊丹副官、杉浦見習士官等三十五名が戦死している。

こうした戦況下に、九日朝には米軍の第一陣がリンガエンに上陸を行ない、ルソン奪還の戦闘が始まったが、日本軍は予ての作戦通り水際での戦闘を避けたため、海岸地区では積極的な戦闘は行なわれず、米軍は同日中に橋頭堡を確保することとなった。

その夜、第二三師団長による出撃命令が出され、高橋戦隊長を始め第三中隊を主とする三五ないし四〇隻（一説には七〇隻ともいわれるが、確実ではなく、名簿上は出撃戦死は四十五名となっており、かつ一艇に二、三名乗った事実もあるので、こう推定される。）が、翌十日午前三時から五時にかけて、沖合に碇泊する米船団に対し、強行攻撃を敢行した。

その戦果は、日本側は火柱三十数本を望見できたので二〇ないし三〇隻を撃沈したと発表し、米軍側は公的記録としては、八ないし一〇隻の被害といっている（その内容については後に詳述する）が、

ともかくこれが㋒による最初であり、しかも最も有効な攻撃であった。

この出撃について、生存者が二名あったが他の出撃者全員が海上戦死を遂げるに至った。（ただし諸種の事情から、この戦死者は特攻戦死の扱いがなされていない、このことについても、改めて後述する）

ポロに残留していた残存者と、スワル基地にあったが出撃に参加できなかった者（約二十六名？）は第二中隊の小西群長（幹一一）が掌握し、基地第一二大隊の整備中隊（草間中尉の指揮）に編入された。

以後一部を除いてルソン北部にあって陸上戦闘に従事し、主としてナギリアン街道、バギオ、ポンドック等に転戦したが、この転戦中にパギオ付近で四名、アンタモックで三名、その他地区で六名が戦死した。

戦隊の被害は、将校十四名、隊員八〇名、下士官二名の合計九十六名の戦死者を出し、戦闘前の内地送還者一名があった。

＊　米軍側発表の「第一二戦隊の戦果」

第一二戦隊の出撃については、後述するものと重複するが、米軍側も率直にこの奇襲を認め、その損害を発表したいくつかの記録があり、これを挙げると次のようである。

まずニミッツの「太平洋戦史」（恒文社）によると、

「その晩（一月九日）　リンガエン湾では日本軍の空襲を避けるため、艦船は煙幕を張り姿をかくしていた。

そのとき日本軍の爆薬を積みこんだ約七十隻の木造合板製発動艇が米水上部隊に突進してきた。大部分は砲火により撃退され、ほとんど残らず撃破されたが、そのうちの数隻は艦船の舷側に爆薬を放つことに成功して退避した。この水上特攻によって歩兵揚陸艇一隻が沈没し、輸送船と歩兵揚陸艇各一隻および戦車揚陸艇四隻が損害を受けた」（同書四一〇頁）としている。

また次に、ロバート・シャーロッドの「太平洋戦争」下巻（中野五郎訳）では、

「彼（山下奉文）はアメリカ軍の上陸後、歩兵の特攻隊による小規模な逆襲計画を立てたが、これは成功しなかった。

すなわち彼の麾下の第一二海上挺進連隊は約七十隻の突撃艇（海軍の震洋と同様の体当たりによる海上特攻隊）がアメリカ軍の上陸当日の夜間、肉薄攻撃を敢行してアメリカ輸送船二隻を撃沈し、八隻を撃破したが、その突撃艇群はほとんど全滅してしまった」（同書九五頁）としている。歩兵の特攻隊というのはおかしいが、これは「陸軍の」ということであろう。

更に同様なものとして安延多計夫「南溟の果に」の引用によると、

「一月十日に駆逐艦ロビンソン、輸送艦ウオアホーク、ＬＳＴ（上陸用舟艇）１０２５・ＬＳＴ９２５・ＬＳＴ６１０、歩兵上陸艇９７４及び３６５に特攻艇が命中、甚大な被害を与え、ウオアホークと９７４、３６５は放棄された」（但し原典の出所は不明）としている。

また同じく同氏の引用による戦艦コロラドの戦時日誌によると、

「一月十日

○三五三　戦車揚陸船九二九号、特攻艇三隻の攻撃を受く。

○四〇〇　第七七機動部隊（護衛空母群）魚雷艇の攻撃を受く。

○四一五　駆逐艦ロビンソン、魚雷艇の攻撃を受けつつあり、命中す。

○四一五　駆逐艦リーズ、魚雷艇の攻撃を受けつつあり、わが速力五ノット。

○四二九　輸送船ウオアホークに魚雷命中、艦は放棄されつつあり。

○四三〇　戦車揚陸船一〇二五号、九二五号、六〇一号被害甚大なり、歩兵上陸

艇九七四号、三六五号沈没状態のまま放棄せらる。

○四三五　駆逐艦フィリップ、われ攻撃を受く。特攻艇一隻撃沈す。

駆逐艦イートン、特攻艇一隻撃沈す。」と記載されており（なお○四一五は、午前四時十五分を示す）、なお「水上に漂っていた特攻艇員数名が救助された。

なお「米国海軍作戦年誌」によると、「一月九日には護衛駆逐艦ホッジス（ＤＥ１２３１）と、兵員輸送船ウオアホーク（ＡＰ―１６８）が何れもフィリピン海域（Ｎ１６度２１分・Ｅ１２０度１１分付近）で特攻艇により被害を受けた」とし、更に一月十日に「戦車揚陸船ＬＳＴ１６１０が特攻艇により損傷を受けた」としており、なお「一月九日にはＬＳＴ９２５とＬＳＴ１０２８が爆雷により損傷を受けた」と記録されている。

このときの出撃戦死者は、厚生省の留守名簿によれば戦隊長以下四十五名となっており、名簿の上欄に「リンガエン沖出撃戦死」と朱書されてある。しかし、なぜかこれらの者は、この名簿上でも特攻戦死者としての特進扱いがされておらず、厚生省から恩給局に送付した水上特攻戦死者名簿にも、氏名の記載がない。

海上挺進基地第一二大隊は、暁第一四二〇九部隊と称し昭和十九年九月十三日に少尉候補者一八期の立川武喜少佐を大隊長として、甲府の東部第六三部隊近衛歩兵四連隊補充隊で編成を終り、十月三日宇品港を出航し、上海に寄港して同月二十二日マニラに上陸した。

十一月五日、一部をマニラに残して、任務地であるルソン島北部の北サンフェルナンドに展開し、これ以後は二三師団（旭兵団）の配属部隊となり、同地区で基地設営作業を行なっていたが、更に師団命令によって、戦隊の展開に先立って対岸のラブラドルに移駐し、スワルに舟艇秘匿基地の設定を行なった。

一月六日から九日にかけ、湾内に進攻した米上陸船団と、護衛艦隊からの艦砲射撃によって、本隊にも戦死者が続出したが、九日夜の戦隊の舟艇出撃を支援し、舟艇の泛水発進を成功させた。

戦隊の出撃後は、海岸線から後退し、二三師団の久保田支隊に合流しようとしたが、上陸米軍によって中断される形勢になり、四月十七日の師団長命令により、残隊員のみで地上戦闘を行なうことになり、主としてサンパレス州マシンロック（西海岸沿岸地区）付近にあって、米軍と戦闘を交え、大損害を受け、以後全滅状態となった。

一方整備中隊（中隊長草間毅一中尉の指揮）は、十二月下旬に戦隊舟艇を整備して、対岸のスワルに移動させた後、後発隊として一月初めに陸路でスワルに向ったが、進行途中で既に米軍の上陸に遭い、進行不能となったため、転進して北サンフェルナンドに帰り、同地区に戦隊で残留した負傷者、病者らと合流し、以後バギオ奥地の河谷地帯で転戦していた。

大隊の被害は、総員九〇五名中、八〇〇名を越え、転属者を除き生還者は六十四名（一説には二十七名ともいわれる）に過ぎないとされている。

事務局より

海上挺進第十二戦隊は海上挺進隊の一番最初に出撃した戦隊である。戦果は米軍の記録でほぼ判明しているが、出撃当時の状況は全く不明である。生還者の記録としては、唯一儀同保氏著の「ルソンの碑」中にＫ君の報告として、次のように記載されている。

リンガエンの火柱

アメリカ軍が各地に上陸を開始したとき、上陸地点に近い戦隊は、今こそ目的完遂の時と舟艇出撃を敢行した。その第一陣がスアルにいた第十二戦隊であった。

一月九日アメリカの艦船団が入ったリ

ンガエン町の沖合は、十二戦隊が基地を移していたスアル湾からは真東にあたり、距離は五キロから十キロほどと推定される海域で会った。

兵員を上陸させ、この海域に碇泊して夜を迎えたアメリカ船団に対し、戦隊長の高橋功大尉が自ら指揮し、三十数隻の舟艇をもって攻撃したのである。

この夜、隊員として出撃したK君は、次のように記録している。

快調にエンジンが動き、爆雷の取り付けを終えた私の艇には、同じ特幹のOとEの両君（二名とも戦死）が同乗したが、O君は昼の砲撃で破片を受け，紫色にはれあがった尻の負傷をこらえていた。

この時実際に出撃した艇は、全体の三分の一で、約三十か四十と思うが、大声や明かりは厳重に禁止され、加えてリンガエン湾一帯に打ち上げられる米艦の照明弾のため、極度に緊張していた私は、自分のことで精一杯で、他のことまで確かめるような状態ではなかった。

戦隊が出撃を開始したのは、真夜中を少しまわったころと思う。出発してしばらくの間は、各艇が定距離を保ちながら照明弾の合間を縫うという困難な進行を要求されたが、それがすぎると、後は各自の判断で、目標艦船を定め散開して進んだ。

はじめは私が運転していたが、途中でO君が「ぜひ自分に舵を取らせてくれ」、と強く言うので、“どうせ助からない”と覚悟しているらしい気持ちをくんで交替した。

アメリカの艦隊や輸送船団は、日本機の攻撃に備えるためか、広い範囲に散開して碇泊していたが、周辺には駆逐艦、魚雷艇による厳重な警戒網があると予測されていた。したがって、先ずこの警戒線をくぐり抜けるのが第一の関門であった。E君と私は、時々不気味にきしむ爆雷を気にしながら艇の操縦席の両側に伏せていたが、艇は異常なく進んだ。すでに他の艇とは散り散りになっており、前後左右に何も見えなかった。

少し波が高かったのがかえって幸いしたのか、負傷している身ながらもO君の巧みな操舵のためか、波間を利用し警戒線を難なく突破できたと思った。このころ、闇の中に真っ赤な曳光弾が飛び交い、ときどき海上に火の手の上がるのが見えた。

神仏の加護を念じつつ進むと、闇の中に目指す輸送船が迫ってきたので、微速にして近寄ると、伸ばした手に船腹がふれた。

ひと呼吸おいて左右一気に爆雷を落とし、同時に艇の甲板に身を伏せた。数秒後、艇の底を突き上げる大きなショックがあり、私は海中に放り出された。もがきながら海面に顔を出したときには、乗っていた艇はなく、他の二人もどうなったか分からず、ただ無我夢中で浮かんでいた。

攻撃目標の輸送船の状況を見届ける余裕もなかったが、あの至近距離とショックの大きさからも、十分効果があったと信じている。

ルソン島転戦の記

元第十二戦隊　林　善信

昭和十九年十月五日宇品港を出港。途中門司港で私達の海上挺進第十二戦隊第二中隊（中隊長　田原弘吉少尉）の三十名は、戦隊本部等とは別の貨物船青木丸（五千トン程度）に乗り換え、そのハッチの上に張ったテントの中でルソン島までの船上生活を続けた。

六連島の沖で船団を編成、十五隻の輸送船に駆逐艦二隻、掃海艇二隻が前後左右を援護する梯団を組み、常に敵潜水艦の攻撃に備えてのジグザグコースで進行したため船上生活は十五日を要した。途中伊万里港に一泊、台湾の高雄港に二泊、

台南沖に一泊し、十月十七日頃にバシー海峡を通過したが、早朝、前方を航行中の輸送船二隻に火柱が上がりまたたく間に沈没した。アメリカ潜水艦の攻撃に会ったためである。

それからの半日は、私達の船も海上に浮かぶ遭難者の救助にあたり、出来るだけ多くの兵士を引き揚げる事になり、船上は足の踏み場もない状態であった。食事の世話から病人の世話と特幹一期の同志達が奮闘したことは言うまでもない。

余談であるが、この時私を含め特幹の軍服や下着などが数多く紛失したため、我々は着替えなしでその後の行動を余儀なくされた。

十月二十日に北サンフェルナンドに入港し、舟艇を揚陸する手筈になっていたが港湾の準備が間にあわず、青木丸のクレーンで海上に浮かばせる破目になった。ところがこの晩、台風にあい舟艇の殆どが海水を被り、後日の毎日がエンジンの大分解修理に追われたのである。

北サンフェルナンドには第十二戦隊の中では第二中隊が先に到着し、戦隊主力を始め基地大隊の到着が遅れた。そのため取り敢えず田原中隊長以下のわれわれだけで、リンガエン湾に面した岬の椰子林のニッパハウスを兵舎として活動を開始した。

戦況は米軍のレイテ島攻撃の時期であり、米グラマン機の来襲が日課となっていた。この地区には高射砲隊や海軍水上機の基地があり、連日の攻防は日増しに激しくなっていくのが肌身で感じられた。

十一月末にようやく戦隊本部を始め第一、三中隊、十二月初旬には基地大隊も到着し、食事の世話や舟艇の格納場所整備が進み、ようやく軍隊らしい規則正しい生活となった。

私と同僚の宇津木政幸君は第二中隊の指揮班に所属し、田原中隊長と三人が同じ屋根の下で寝起きしていた。その頃は戦隊本部からの命令の受領や、中隊長の指示を各小隊に伝える等の任務に当たっていた。

十九年十二月十五日午後の会報を受け、北サンフェルナンドの岬の突端で舟艇を整備中の中隊長の許に伝達のため約二粁の海岸線を徒歩で行動中、米軍グラマン機の攻撃を受けた。前述の通りこの付近は海軍航空隊の水上基地や陸軍高射砲隊の陣地があり、爆弾と機銃の攻撃は私の頭上真上からの様相であった。

一瞬グワンという音と爆風、その時私は顔面に大きな衝撃を受け倒れた。この時顔面を爆弾の破片で負傷した。どうにか立ち上がり、中隊長の許まで血を出しながらたどり着き、戦友に扶けられて近くの海軍航空隊の医務室で応急手当を受け、夕方北サンフェルナンドの兵担病院に収容された。翌十二月十六日バギオの陸軍病院に転院、手術を受け約半月の間治療を受け、二十年一月五日まで病院生活を送った。

（負傷名　下唇擦過（歯牙損傷）　上唇貫通爆弾破片創）

入院した当時のバギオ陸軍病院にはルソン島南部やレイテ島等に出て負傷した飛行兵やマラリヤ患者等が多かった。軍医や看護婦も多く、内地の病院にいるような感じであった。しかし二十年元旦早々にアメリカ軍の大船団北上のニュースが伝わり、上空を飛ぶ飛行機も日本軍ではなくアメリカのもので制空権が全く失われたという感じとなった。

年末に内地送還者を乗せる最後の病院船の乗船を辞退し、戦友のいる基地に復帰する決意で、負傷箇所の抜糸が終わると、一月五日軍医に自己退院を申し出、無理に単独退院した。しかし病院から一歩出ると、入院時のバギオとはまったく違った雰囲気になっているのがよく感じられた。

第十四方面軍司令部がマニラからバギ

オのこの地に後退したため、街中はあわただしく軍用車が走り兵隊の数が増え、さらに現地人の日本兵に対する目つきが変わってきたことが明らかに読みとれた。

私は直ちに軍司令部の参謀部に行き、これ迄の経過を説明し、原隊に復帰するために、戦隊が所属している兵団、場所等を尋ねた。その結果第十二戦隊は当時旭兵団の指揮下にあり、リンガエン湾のスアルに基地を転じている事がわかった。

その日はバギオの兵担宿舎に一泊し、翌日、リンガエン方面に向かう軍用車に便乗し、ベンゲットロードを下り、シソンにある旭兵団司令部に向かった。

山から一歩平野部に出るとグラマンの旋回や機銃掃射でいよいよ戦場だ！という実感が強く心身に伝わったような感じがしたものである。

シソンの司令部に行くと、副官の三好少佐から「兵団長は第十二戦隊の成功を期待している。輜重隊の中尉を輸送隊長に、また見習士官を長とする通信小隊十四名を同行させるため輸送車二台を準備するのでただちに出発」と言われ、又「これを戦隊長に」と日本酒二本と牛肉一包を渡された。

一月六日にはアメリカの戦艦を加えた機動艦隊を先頭に大船団がリンガエン湾に進攻して上陸の機を待っていた。従ってその夜の湾の上空は絶えず照明弾が上がり、艦砲射撃の砲声が交錯していた。そうした中で、われわれの乗ったトラックは照明を暗くしたのでなかなか進めず、目的地のスアルまであと三十粁の地点で夜明けとなってしまった。

夜明けと共にグラマン機が椰子の木すれすれに飛びはじめ、自動車での行動は不可能となり、私と通信隊十四名は車から降り徒歩で行くことになった。

昼間は椰子の木陰に潜み、もっぱら夜だけの行動になったが、地理には不案内のうえ、現地人には話が通じない。

地図だけを頼りに歩いたが、川や沼がつぎつぎとあってひどいものであった。それでも二十粁程進んだ。そして一月八日の朝となり、住民のいないニッパハウスで夜を待った。

夕暮れになってまた行動を開始し、四粁ほど歩き、スワルまであと六粁の地点で旭兵団の最前線という装甲車隊に出会った。こんな所で出会うのは心強かったが「アメリカ軍はすでに上陸を開始し、この先の三叉路まで戦車が来ている。今からスアルに向かっても突破できないし捕虜になるだけだ。われわれもすぐここから撤退する」という返事である。

残念、間に合わなかったか、という気持ちになった。やむなく通信隊の見習士官と相談したが、引き返すほかないとシソンに向けて引き返した。途中で歩兵中隊と一緒になったので、ゲリラの攻撃もあったが無事味方陣地に帰り着けた。

リンガエンのスアル近くまで行きながら引き返して来た私は、その後旭兵団の副官付きになっていたが、その頃基地第十二大隊の整備中隊長の草間中尉が、約百名を率いて指示を受けに司令部に来た。聞けば、「サンフェルナンドの基地からスアルに戦隊や基地大隊の大半が移動したが、最後はアメリカ軍の進攻でリンガエン湾沿いの行動が出来ず、こちらへ来た」という。

この中に第二中隊第一小隊長である小西少尉と和田君がいた。特幹の馬場君は此処へ来る途中ベンゲットロードのキャンプ３で病死したと聞いた。

この後は草間中尉の中隊と同行し、歩兵要員となり銃を持ってルソン島北部の山岳地帯で約七ケ月戦った。

特に二十年四月のバギオ西北方のナギリアン街道付近での米軍との戦闘は熾烈を極め、これに参加した草間中隊も多数の戦死者を出した。

五月からは雨季に入り、またバギオ東方約三十粁の地点で約一ケ月芋ばかり食べていた。（私もこの間マラリアに冒され体力が弱っていた頃だった）

六月から戦闘が始まり、私達はアグノ川上流ソクドック付近の渓谷に後退し、戦況を見守る事となった。

終戦はこの渓谷で知り、歩兵六十四連隊の指揮下に入り九月十四日米軍の武装解除を受け収容された。

この渓谷で戦隊の小隊長小西少尉は栄養失調とマラリヤで戦病死し、また和田軍曹もマラリヤで同じく戦病死した。

一人残ってその墓穴を掘り、遺体を埋めたときの悲しかったことは今も忘れることは出来ない。

かくして戦争は終わり私は昭和二十一年十月十七日内地の土を踏む事が出来た。

その後昭和四十年までガムシャラに働いた。

四十一年同志の呼び掛けにより思い出の地江田島幸の浦に慰霊碑を建設し、その除幕式に亡き戦隊長高橋功大尉の遺影をもって同期の宇津木正幸君と列席し、特幹一期の同志と再会した感激もまたひとしおであった。

第一三戦隊及び基地第一三大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一三戦隊は、通称暁（比島では威）第一九七五二部隊と称し、昭和十九年九月五日から同月下旬まで、幸ノ浦基地でⓁ訓練を行なっていたが、十月五日宇品で正式に戦隊編成となった。

戦隊長は陸士五三期の馬場計蔵大尉、第一中隊長は藤堂高豊少尉、第二中隊長は榎島武少尉、第三中隊長は吉原次郎少尉（いずれも陸士五七期）で、戦隊本部付将校（又は副官）として亀谷保見習士官（幹候一〇期　昭一九、一〇、二六海没戦死）、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一一期の見習士官、隊員は特幹の一期（十九年十一月伍長）であった。

戦隊は十月六日、宇品を出港し、八日に門司を経て途中台湾沖航空戦の退避のため伊万里湾に仮泊した後、高雄に着き、同月二十三日高雄港を出航した。

十月二十六日バシー海峡で、第一中隊の乗船していた輸送船大博丸（大彰丸？）及び第三中隊の乗船していた輸送船泰洋丸が、米潜水艦の魚雷攻撃を受けて爆沈し、第一中隊はほとんど全員に近い二十八名が海上で戦死し、第一、三中隊の舟艇は全部海没してしまった。

生存者（主として第三中隊員）は護衛の艦艇に救助され、ルソン島に廻航され、二十八日から三十日にかけて、北サンフェルナンド附近に上陸し、ここに待機していたが、十一月十三日マニラ方面に行くトラックに便乗してマニラに着いた。その後、十一月二十六日コレヒドール島にわたり、二十七日他戦隊（どの戦隊か不明）のⓁを二十七隻受領、機帆船の曳航によりマニラ港に回送、十二月三日よりトラックにて任地のカルパン半島タラガに輸送した。

又、第二中隊の乗船した江差丸は魚雷攻撃を回避し、十月二十七日ルソン北部のラボック湾に避難し座礁、満潮で離礁して二十八日北サンフェルナンドに入港、ここで舟艇を揚陸したが、台風の襲来で係留中の舟艇約三十隻は全部海没、砂に埋まってしまった。　隊員は一時第一二戦隊の基地に滞在していたが、列車等によりマニラへむかった。中隊は十一月下旬にタラガに到着、　戦隊全員が揃ってバタンガス州カルパン半島のタラガ地区に展開したのは十二月初旬であった。

一中隊の隊員は殆どが海没戦死したため、第二、第三中隊よりそれぞれ約十名宛第一中隊に転属した。

なお同地区近辺には第一四戦隊も配置された。

二十年に入り、一月八日に一度出撃準備の命令がでたが、翌日取り消された。

一月末にナスグブに米軍が上陸してきた際第一五、一六戦隊は当面の出撃戦隊

とされ、第一三戦隊は第一四戦隊とともに次期出撃用として基地にそのまま待機するよう命ぜられていた。一月、二月には第一五、一六戦隊が主として出撃した。

二月一六日以降、基地第一三大隊が北上してタナワン地区の防衛に当たることになったのを機に陸上戦闘用意のため、戦隊は第一四戦隊と共に基地第一四大隊長古川大尉の指揮下に入ることになった。

戦隊は基地に留って待機の態勢をとっているうちに、ナスグブに上陸した米軍はバタンガスを目指して進行し、三月になるとカルパン半島東面のマイナガ基地も北部より攻撃を受けはじめ、一方二月上旬にタール湖北方のタガイタイ方面に降下した空挺部隊を含む戦車隊も進出してきた。このためカルパン半島一帯は米軍により背後を遮断され、包囲される形になった。

三月十一日、基地大隊長は第二基地隊本部長堤中佐より、“当面の敵を殲滅して「クエンカ」に前進すべし”との命を受けた。

このため第一三戦隊と第一四戦隊の両舟艇部隊をバタンガス湾を航行して敵の後方、カルパン半島東の「サンタマリア」附近に逆上陸させ逆に包囲の態勢をとって本隊の戦闘に寄与することになった。

三月十三日夜、第三中隊長吉原少尉の指揮する第三中隊は、重機等を携えた基地隊員をともに乗艇させて出発、第一四戦隊の福田捨喜群長等の指揮する舟艇群と海上にて合流する計画であったが、両者の出発時刻が食い違ったためか海上にて予定のとおり集結できず、吉原隊は独自に目的地附近に上陸した。

しかし、米軍陣地が見当たらず、基地へ帰ることも不可能であると判断し、マルプニヨ方面へ前進することに決して北進し、米軍・ゲリラ等と交戦しながらマルプニヨの藤兵団（第一七連隊）本部に到着した。この間の戦闘で吉原中隊長他数名が戦死し、兵団本部へ合流できたのは、若干名の戦隊員と基地隊員であった。

これらの隊員は、その後カルパン半島を脱出してきた第一、第二中隊員と合流した。又、一部の隊員は中隊とはぐれて別行動をとり、クエンカの第一七連隊第二大隊（市村大隊）の指揮下に入った者もある。

カルパン半島の基地大隊は、海上よりの逆上陸攻撃予定時期と同時に一斉に反撃に移ったが、頑強な敵に阻止されて作戦は意の如くならず、甚大な損害を残して不成功に終わった。

戦隊主力は大隊本部の菱形山戦闘指揮所及び峰続きの大観峰（二百高地）にあったが、米軍は半島南部に進出してきたため、大隊主力と共に完全に包囲される態勢となった。この包囲から脱出するため三月十五日以後、戦闘を継続しながら、カルパン半島の中央山地を縦断し、漸くマビニー西方、半島南端の五百高地への撤退に成功した。この戦闘では馬場戦隊長以下多数が戦死した。

その後、作戦を変更して、マルプニヨ方面の兵団主力の決戦に参加することになり、三月二十七日隠密裏に転進を開始、カルパン半島での米軍の包囲から脱出に成功し、途中戦闘を継続しつつ四月六日マルプニヨの藤兵団本部との連絡に成功し、以後その指揮下に入った。

この間の戦闘で馬場戦隊長以下合わせて二十三名を越える戦死者を出した。

マルプニヨに展開以後は、四月十日頃に命により第一四戦隊長江島大尉の指揮下で、第一四戦隊員と共に江島遊撃隊を編成し、マルプニヨ山付近の海軍山にて米軍及びゲリラ隊との戦闘を行なっていた。

一方、藤兵団司令部は米軍の猛攻を受けて玉砕寸前の状態であったが、バナハオ山に転進することになり、四月二十八日に転進を開始した。

海軍山の戦隊員も連絡を受け、日比野大尉（第六戦隊長）が第一四戦隊と第一三戦隊を纏め、第一四基地大隊と共にバ

ナハオに転進することとなっていたが、斬込みに出撃していた隊員に連絡が遅れ、別個に行動をとらざるを得なかった者も多数あった。途中、米軍占領地を通過するため、米軍、ゲリラ部隊との交戦も数多く重ね、多くの戦死者を出しながら、五月中旬以降にバナハオ山に到着し、ここで第一四、第一九戦隊の残員等と共に第一中隊長藤堂中尉、又は第一四戦隊副官の豊福少尉の指揮下に入って自活、遊撃戦等を行っていたが、二十年九月に終戦を迎えた。

なお一部の戦隊員はカルパン半島の包囲突破以後、本隊と別れてしまい、マコロド山に陣地を占めていた藤兵団第二大隊（市村大隊）の指揮下に入り、他の第六、一四、一五、一六戦隊員らとともに同山麓のクエンカ地区で米軍との戦闘に当たっていたが二十年九月マコロド山にて終戦を迎えた。

同戦隊の戦死者は、将校十三名、隊員七十一名、下士官二名の合計八十六名であり、ほかに戦闘前の転属者一名があった。

海上挺進基地第一三大隊は、暁第一四二一〇部隊と称し、昭和十九年九月十三日に千葉県佐倉の近衛歩兵第五連隊補充隊で松田誠吉少佐を大隊長とし、中隊長には堀田勇次中尉、八木原巳之次少尉等で編成が行なわれた。

大隊の主力は十月三日に宇品を出航し、十日に上海のウースン港に寄港し、海上無事に同月二十七日マニラに上陸した。

十月八日第二陣として第四中隊（整備中隊？）が宇品を出航し、高雄を経由して十月二十六日に戦隊と同様バシー海峡で、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、乗船していた約半数が戦死する被害があった。

ここで救助された者は、十一月二日になってマニラに上陸し、先着の大隊と合流し集結をほぼ完了した。

集結後、大隊は十一月十二日マニラを出発して南下し、十一月十五日にバタンガス州タラガに到着し、以後二十年の二月二十二日までの間、同地にあって舟艇の秘匿作業、兵員の宿営などに従事していたが、一月十五日には大隊の一部を選抜して、振武集団の野口兵団に転属させるよう命令を受け、第二中隊がこの転属中隊となってラグナ州アンチポロに転進していたが、三月二十四日同地で米軍との戦闘により、ほとんど全滅状態となった。

二月十八日には藤兵団長は、基地本部長の堤中佐に対し、大隊の残り全部を藤兵団に転属させるよう要求し、これに基づき、大隊は二月二十三日にタラガを出発し、二十七日にアラミノスに着き、藤兵団所属の斉藤大隊を支援する目的でラグナ湖の南岸、カランバ南方台地を占拠し、三月上旬に米戦車師団と戦闘を行なった。

なおこの戦闘は第一三大隊、第八六飛行場大隊基地員等と共同で戦闘態勢をとっていたが、大隊主力は三月九日に要地のサントトーマスに移り、マニラ方面からの米軍と戦闘したのであるが、タナワン付近で大隊長が戦死したほか、戦死者が続出したため、二十五日にはサントトーマスを撤退し、二十九日に藤兵団の主力陣地となっていたマルプニヨ山に到着、ここで配備について約一ヵ月間戦闘していたが、更に兵団の分散命令により五月一日に、バナハオ山に転進し、六月中旬にはキャンプマヤビス付近（バナハオ山北東）に移動し、同地で敗戦を迎えた。

同大隊の損害は、総員八九六名中、七六二名が戦死し、生還者は一三四名であった。

「私の戦時記録」

元第十三戦隊　上野　克喜

始めに　（事務局より）

本文は、元第十三戦隊所属の上野克喜君の手記を同君のご了解を得て掲載するもので、比島南部のカルパン半島に包囲

されていた第十四基地大隊長古川金造少佐の指揮下にある第十三、第十四戦隊及び第十四基地大隊（以下本隊という）が包囲を突破するため、第十三、第十四戦隊からの舟艇隊（約十隻くらい宛）による逆上陸作戦で、米軍陣地を背後から攻撃してこれを混乱させ、同時に本隊は正面から攻撃して包囲を突破しようとする作戦でありましたが、この作戦は徒労に終わり、本隊は暫時半島の奥深くへ退避しました。

この逆上陸部隊はどうなったのか不明でありましたが上野君の手記により、第十三戦隊の逆上陸部隊の行動経過が明らかとなりました。

一、特幹隊入隊と終了

昭一九年四月一〇日船舶兵特別幹部候補生隊入隊

香川県三豊郡　豊浜

部隊長　於保佐吉中佐

中隊長　柿原大尉　区隊長　高田少尉

昭和一年六月一日頃より舟艇訓練開始。六月下旬から七月上旬にかけて小豆島に移駐

七月中旬、陸士五七期の吉原少尉他六十名が区隊長要員として着任

八月中旬から第一次編成の海上挺進戦隊の四ヶ戦隊が豊島でⓁ艇の特攻演習を行っていた。

八月二五日教育課程終了。陸軍上等兵。五日の予定で休暇。

二，休暇が終わって広島県江田島の幸ノ浦の第十教育隊に入隊。

隊長　松山作二中佐。

海上挺進第一三戦隊編成

戦隊長

馬場計蔵大尉（陸士五三期）、

第三中隊　中隊長

吉原次郎少尉（陸士五七期）

第一群長　深尾文夫見習士官

（幹候一一期）

第二群長　佐藤栄見習士官（同右）

第三群長　相澤直見習士官（同右）

私は第三群に所属した。

三，動員下令より比島上陸まで

昭一九年一〇月五日　動員下令。

一〇月一〇日一三隻の輸送船団の中、泰洋丸に乗船して門司発。

一〇月二一日台湾高雄港、（途中伊万里湾にて約一週間仮泊、台湾沖航空戦退避のため）

一〇月二三日高雄港出発。

一〇月二五日米機グラマン飛来船団を偵察する。

一〇月二六日〇七時頃輸送船泰洋丸被雷、沈没。海中に飛び込み当日夕刻まで海中にあり。

一〇月二六日一九時頃海軍の駆潜艇に救助さる。一二時間海中にあり。

他の戦友達は台湾から急行してきた艦艇に救助された者もいる。

一〇月二七日他の輸送船に移乗。

一〇月二八日北サンフェルナンド港着、上陸する。

一〇月三一日中隊全員が揃った。

四，マニラ着、コレヒドール島へ

昭一九年一一月一〇日伍長

一一月一三日トラックに便乗してマニラへ、兵站宿舎に宿泊。

一一月二六日コレヒドール島へ（舟艇受領のため）

他の戦隊のⓁ艇を受領、機帆船に曳航させてマニラ港まで回送。

（注　第十三戦隊の舟艇は輸送船沈没、又は台風のため全部海没していた。）

昼間は空爆を受けるので夜間航行、波が高く転覆しないように操縦。

一二月三日舟艇をトラックに積載、南部ルソンバタンガス州タラガ基地に輸送。（日没後出発）

タラガでの宿舎は学校跡の校舎。

舟艇は濠を掘り、これに入れた。

五，タラガ基地での生活

昭一九年一二月三日　マニラより大隊砲一門、砲弾を受領して輸送。

昭二〇年一月五日　グラマン機が数回に　亘り基地を爆撃、作業隊に数人の

負傷兵が出た。
その後小さい艇が艦砲射撃をしてきたが、被害はなかった。
一月八日出撃準備翌日解散
米機動部隊ミンドロ沖を通過中との情報が入り、戦隊本部より急遽出撃準備を完了して各中隊の濠で待機せよとの命令が入った。
その一夜はまんじりともせず、一九才の青春まで育ててくれた両親をはじめ、兄弟姉妹、親類、恩師、先輩、学友の顔が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。いよいよ死ぬのかと思うと涙も出ず、唯呆然と時の経つのを待つ。前後左右の戦友はどうしているのかと顔を見ると、やはり悲愴な顔をして一点をじっと見つめている。
夜が白々と明ける頃、中隊長の「解散」の声を聞き頬をつねり、生きていた喜びを戦友と確認し合ったことが、今でも頭に残っている。
この機動部隊は北上を続け、おそらくリンガエン湾に進入、九日頃上陸を開始したものと思われる。
戦後知ったことであるが、リンガエン湾スワルにいた第一二戦隊が出撃、殆どが戦死したとのことである。
一月一〇日以降　舟艇整備、
子牛、鶏を確保料理する。
バナナ、パパイア、ザボン等を採取する。
戦況
一月三一日米軍ナスブグに上陸。
二月一日米空挺部隊がタール湖北部に降下した。
三月一日ナスグブに上陸した米軍はマニラに進撃、第一四方面軍は北部ルソンバギオに撤退したと聞く。第二次作戦として、三月に入ると、ナスブグ上陸部隊が進行を始め、バラヤン、タール附近にいた日本軍を駆逐してバタンガスを目指した。
三月一〇日米軍はバタンガス占領、カルパン半島、マイナガ、タラガへの攻撃を始めた。
第一三基地大隊は一個小隊を残し内陸部に移動した。

六，マイナガ逆上陸、藤兵団へ

三月一三日戦隊長命令で吉原少尉の第三中隊は作業隊の重機分隊と共に今夜半舟艇にてマイナガへ逆上陸、同じく基地を発進した第十四戦隊員と合流して米軍の砲兵陣地を爆破し、包囲されている友軍のクエンカ方向への陸路突破を可能ならしめ、その後藤兵団に合流せよとのことであった。
南下した米軍はマビニー（第一四戦隊基地）タラガ（第一三戦隊基地）を攻撃開始早朝から砲声が響き至近弾が落ちる度に白い煙が立ち、ズシーンと体にこたえる。
昼から準備。小銃は五人に一丁、手榴弾は二～三個、小型箱爆雷一個と決まった。出撃用の二五〇kg爆雷は信管を抜いて海岸に埋めた。
不必要な物は焼却、背負い袋に必要な食糧、衣類、地下足袋等を入れた。夕食には豚のカツ、ステーキ類を腹一杯に心おきなく食べた。
三月一四日夜明け、
舟艇を地下壕から引き出し海に浮かべる。私と丸内・早坂が一緒に乗る。早速エンジンを始動するも不調、冷却水が上がってこない。このままでは途中でエンコすること確実。
隊長に報告すると、他の艇に移れと命令あり、直ちに乗り移る。途中十四戦隊と合流すべく海上にて待っていたが来なかった。遅くなるので、そのまま進んだ。
未明に上陸地点であるマイナガ海岸に上陸は成功した。一四戦隊の舟艇があり皆上陸した後だった。
上陸後あまりにも静かなため気味が悪い、敵のいないことを確かめ、海岸線を辿り道路に出る。その時黄色の電話線らしき物を見付け、隊長命令で切断して丸めて捨てる。後で敵に発覚されなければ

よいがと思いつつ。
道路を横断してすぐ敵の戦車がバタンガスの方から来た。それみたことか、やっぱり気づいて偵察にきたようだ。全員道路下に隠れる。中隊長は箱爆雷をもって肉弾攻撃せよと命令するも誰一人として腰を上げる者がいない。皆おじけている。
幸いにも指名がなかったので命拾いしたと思っている。
中隊長の機嫌は悪い。勇気のない部下だと思ったに違いない。戦車は我々に気づくことなく高らかな音をたてて過ぎ去っていった。
すっかり明るくなったので移動を始める。
原住民のいる村落を通り、山に入ろうとしたとき、後部の方で手榴弾らしきものの爆発音がした。誰か負傷した者がいたと思うが記憶にない。
急いで山の中に入り、斜面に這いつくばりながら敵の砲兵陣地は何処かと目を皿のようにして捜すも皆目不明、二、三時間も経った頃突然砲弾が飛んできた。至近弾のようだ。どうすることもできずそのまま砲撃の止むのを待つ。
道路での電話線の切断、ゲリラの手榴弾投下等があって仕返しによる攻撃と思われる。この砲撃で戦友の井口・大屋・岩本（韓国出身）伍長が戦死した。僅か半日もたっていないのに可哀想だ。しかし明日は我が身かと思うと嫌な予感がする。
薄暗くなり相沢第三群長と丸内伍長が斥候に出て戻って来なかったと記憶している。
（注　この時、丸内君等は道を間違えたのか、クエンカ方向に行き、第十七連隊第二大隊（市村大隊）の指揮下に入り終戦（マコロド山）を迎えた。）
三月一五日、昼間は生い茂った沢の中で休息する。夜間行動開始、敵の砲兵陣地を捜して廻るも発見できない。食事も煙を出すことができないので生の儘食べる。
原住民は日本軍は夜中に行動することを知っているので部落全員が教会若しくは学校に集合しているから民家があっても安心して通れる。そして食糧も僅かながら入手できる。しかし道路を横断するときはゲリラが警戒しているから容易ではない。先ず斥候が出て安全を確かめてから一～三名ずつ速やかに横断する、発見されるとカービン自動小銃が火を噴く。応戦することなく鎮まるのを待つのみ。本当に負け戦は嫌だとつくづく感じる。
三月二〇日、山の斜面で昼間休息中、ゲリラに発見され銃撃を受けた。直ちに重機（普通は台座に取り付ける）を持ったままやたらに撃ちまくる。暫くして重機にはかなわないと思ったのかゲリラは退散した。
我々も移動しないと危険だ。重機分隊の兵士が足を負傷している。「さあ行こう」と手招きするも、手を左右に振って断る。立てないのだろう。今も痛々しいその姿が脳裏に焼き付いている。氏名も住所も知らない。秋田鉱専出身と聞いていた。
その夜私が道を探しに斥候に出る。幸いに斜面を下りて川に出る。このところ水筒も空になっているし、喜んでこの旨隊長に報告した。いざ川に出て水を補給し、さあ出発だと歩くが川から上に上がる道がない。全く間抜けだと隊長にこっぴどく叱られたことは言うまでもない。
三月二二日、米軍の砲兵陣地を捜すことより、現在の状態では藤兵団に合流することが先決ということで今後の行動を変更することになった。
何時眺めても南の国の夜空は綺麗に澄みわたり星は輝き月は煌々としている。
五時間くらい歩き続けたろうか、タピオカ畠で中隊長が寝ころび、夜空を見上げながら私に「上野伍長綺麗だなあ、俺はもう行きたくないよ、このままずーっと月を眺めていたい」と語りかけながらふーっとため息をつく。

俺だって同感、誰が人殺しなんかしたいもんか、そして殺されたくないよ、やっぱり疲れているな、陸軍きってのエリートコースの陸軍士官学校出身は逆境に弱く甘いなあと思い、この先どうなるか、嫌な予感が頭をよぎるが、これではいかん「さあ出発隊長」と言って先に歩く。他の戦友達は何があったか知る由もなく唯々黙々と付いて来るのみ。

二三日、昨日のことはすっかり忘れて深い沢で休息する。

沢の斜面で私が立哨を終わり、次の者に引き継いでいるとき、突如カーピン銃の襲撃を受ける。あわてて二人とも引き揚げたので小銃を忘れてきた。誰が取りに行くか押し問答、結局「俺が取りに行く」と言って取りに行き引き返して来ると、隊長が「俺が今から行ってゲリラを説得してくる」と云う。「私も同行します」と言ったところ、「お前はこの沢をまっすぐ進めばよい」と命令され、月足伍長他数名の者が同行した。

戦争で今更説得とは無理だろう、何か考えすぎて頭が変になっているのだろうと疑念に思っていたが、云われたとおり沢を進んだ。

三〇分もたったかと思った頃隊長が説得に行った方向で物凄い銃撃戦が始まる。さては隊長一行がやられているなと直感する。そうするとこの沢も危険、別の沢に移動しようということになり、歩いた後の草は丁寧におこして足跡をかくす。急斜面があり、谷川になっているのを見付ける。一段目の降り口、二段目の入り口の足跡を全部消して、もしも弾が命中しても声を出さずにこらえろと皆で決めてじーっと時のたつのを待つ。

ガヤガヤとタガログ語で喋りながらゲリラがやってきた。バリバリパンパンと無差別に斜面に向かってカーピン銃を撃ちまくる。

ゲリラもまさか三段がまえで隠れているとはつゆ知らず、僅か三十分足らずであったが引き揚げる。その間の時間の長かったこと、皆顔色は土色に変わり命のあったことを喜び合ったことは今でも脳裏に残っている。

そろそろ太陽も沈む頃月足伍長が現れた。軍衣はボロボロに破れている。彼の語るところによると銃撃戦で隊長は戦死、遺品として図嚢だけを持ってきた。

月足伍長の軍衣のボロボロは逃げ込んだ場所が水牛の牧場で、驚いた水牛が角で突きまくり、命からがらあっちに逃げ、こっちに逃げ、挙げ句の果て角に引っかけられ垣根の外に投げ出されて九死に一生を得たという笑うに笑えない武勇伝であった。

三月二四日逆上陸してから十日も過ぎると食糧も不足してきた。生の南瓜、隼人瓜、タピオカを食べて飢えをしのぐ。

隊長戦死後重機分隊長と我々の間で話し合いの結果、戦隊の久保伍長が指揮をとることになった。

三月二五日砲弾の落下する方向が多分友軍陣地があるものと信じ黙々と歩を進める。

暫く進んだところで黄色の電話線を発見する。日本軍の電話線に間違いないと確信、辿っていくと山上の監視所に通じていた。リパ飛行場の警備大隊ではなかったかと記憶している。勇気百倍、今までの苦労を忘れて久方ぶりに家を眺めて道路を歩く。漸く大きなコンクリートの建物に案内されて生きている喜びを感じた。

屋根の下で寝るも砲弾が近くで炸裂する。寝ていてそのままやられるかも知れない、先輩の体験者の話によるとこれは敵の不寝番の役目をする砲撃であることが判り、漸く眠れた。

三月二六日夜が明け始めると米軍の砲撃が待っていましたとばかり、益々激しくなってきた。この地もあと、二、三日で占領されることは確実だろう。早めに撤退することが良策、ここの隊と共にマルプニオ山の藤兵団陣地に転進することに決定した。

リパ地区の街並みを通過の際、悪臭が鼻をつく異様な臭いだ。聞くところによるとゲリラをはじめ多数の住民を殺害し、谷間に捨て、皆重なり合って眠っているという。これは事実だった。

三月二七日タラガ基地を出発してから二週間目にして目的こそ果たし得なかったが、友軍のいるマルプニョ山に到着、兵団司令部の洞窟に至った。

洞窟の高さは二メートル、幅二メートルW字形に二〇〇メートルくらいの道は縦横にはしり、司令室、高官の部屋、医務室、炊事場等いたれり尽くせりで、こんなところで戦闘指揮をとっていたとはつゆ知らず驚いた。

一線の兵士は食うのも食わず、命を的にタコツボに入り戦っているのにこんなに上下の差があるとは知らなかった。

暫くして兵団長（藤重大佐、秋田歩兵第十七連隊長　陸軍中将の階級章を付けていた）上原参謀（少佐　大佐の階級章を付け、参謀長と呼ばせていた）が出てきた。

久保伍長がバタンガス州カルパン半島タラガ基地から転進してきた旨申告した。すると上原少佐が軍刀を振り上げ、ウイスキーの臭いをプンプンさせながら開口一番「逃げてきた兵隊には飯は食わせん、速やかに第一線に行け」と叱られた。

さて困ったことになった、いよいよ最後だと思い観念していたところ、兵団長が戦隊員一人一人に特殊技術の有無を聞いた。私は有線通信の資格はあったが咄嗟に無線通信士の免許を持っていると嘘をついたところ、すかさず通信隊無線班付を命ぜられた。吉田伍長は有線班にまわった。他の戦友は兵団本部の直属守備隊となり、前線に出て行き、私は戦隊から離れることになった。嘘も方便で得したのはこの時だけであった。

皆と別れを告げる、本当に最後の別れとなった戦友は二〇名を越えた。兵団本部から五〇〇メートルくらいの所の山の沢にあるニッパハウスの通信中隊の一色中尉に転属の申告をした。

三月二八日、翌朝一〇時頃無線班に行くため準備中、ものすごい悪寒におそわれ、体中がほてり、歯はガクガクと鳴りだし、ふるえがきた。普通の熱病でないことはわかる。通信の兵隊がそれはマラリアだという。なるほど寒くて寒くてどうしようもない。暫く炊事の火にあたるも効果なし、仕方なく寝てみるも結果は同じ、厄介な病気になった。ありったけのものをかぶせてもらった。キニーネ薬（マラリアの特効薬）はない。ただ、時のたつのをひたすら待つのみ。二時間もたった頃だんだん気分がよくなり、意識が戻り正常になった。

三月三〇日、マラリアは一日おきにしかも発熱時間も三〇分ばかりずれてくることも判り一〇日前後繰り返しておればよい、これで一安心した。

四月一〇日、マラリアも下火になり、おさまってきた。兵団本部に近い無線班の洞窟に行き班長に転属になった旨申告した。

四月二〇日頃、兵団の防御戦は各所で破られる。司令部正面にも砲弾が絶え間なく飛んでくるようになった。

山上に張られた無線アンテナは砲撃で一日数回切断される。砲撃の合間をみて班の者が命がけで修理してくる。前線からの連絡は皆無。

無線班の日課は、内地及び外国の短波放送をキャッチして司令部に報告することであった。

沖縄戦の開始、東京の大空襲、ルーズベルトの死亡、等の情報をキャッチ。

七，バナハオ山へ転進

四月二八日、兵団はマルプニオ山での戦闘を中止し、二九日三五㎞東方にあるバナハオ山に転進し、最後まで戦うことを命令した。

洞窟内の戦傷病兵達の歩ける者は除き、身動きできぬ者には自決用の手榴弾を渡された。

一色中隊長より、有線班に行った吉田伍長と二人で司令部正面の米軍陣地に斬込隊として箱爆雷で襲撃せよとの命令を受ける。他の一組は飛行基地の曹長の組であった。

兵団が転進するためのカモフラージと思われ、あまりにもそのエゲツナサには強い憤りを感じた。無線班にお礼を述べ、お互いの幸運を祈って吉田伍長と目的地に向かった。

襲撃するには未だ明るいので、二人は小さな洞窟に入り時間つぶしにどうするか話し合った。

吉田伍長は命令だから出発するという、私は兵団が逃げるのに俺たちは何故餌食になるのか、「俺はこのまま引き返す」と言い争っているとき、機関銃の襲撃を受けた。この時とばかりと私は爆雷をおいて一目散に山の上へ駆け上った。吉田伍長はどうしているかと振り返るとあれほど言っていたのについてくる。

誰だって命は惜しい仲良く転進しよう。通信隊の中隊長には顔を見せないように遠く離れてついて行けばよい。

吾々を虫けら同様に扱い、どうせ戦死したのだからかまわんかまわん。お陰様で吉田伍長も私も無事帰還した。吉田伍長は警察官定年退職後病死した。

四月三〇日朝マルプニオ山を脱出。

夜が白々と明ける頃ゴーゴーと爆音に似た音がする。山の稜線を眺めると、昨日までの我が軍の陣地に黄色い戦車みたいな物体が動いている。あれは道路を造っているブルドーザーか、その後にトラック、ジープが続いている。スコップとモッコでヨイショ、ヨイショと仕事をしたところを、ブルドーザーにトラック、全く月とスッポンこれで戦争に勝てるわけはない。今更ながら近代兵器を使った機動力と物量の豊富さに舌をまくのみ。

五月五日、昼間は谷や沢にかくれ、夜間行動をとらなければならない。

道の両側には椰子林、バナナ畑、とうもろこし畑があり、その中に部落が点在する農村である。しかし住民といえどもいつゲリラに早変わり襲撃してくるやわからず油断は禁物である。

五月一〇日付けで軍曹になったことが後でわかった。

夕方突然雷が鳴り、ものすごい風雨となる。

山の稜線の大木の陰に雨を避ける。昼、畑でとってきた生の落花生を皮をむきむき食べる。一夜明けるとウソのようにより天気になった。

五月一五日、いよいよバナハオ山に入る。三日くらい前の一二日山の入り口附近で兵団の軍医長一行がゲリラに襲撃され、多数の戦死者をだしたと聞く。

五月一六日、バナハオ山に入る。昼でも寒いのに、夜になると更に冷え込み、暖をとるための衣服、毛布はなくただふるえて夜の明けるのを待つのみ。中腹の密林の中に海軍機の残骸があった。

五月一八日、二〇〇〇メートルを越える密林には葉の大きい高山植物、シダ類が多い、そして異様な声を出す猿類。人間の赤ちゃんに似た声を出す動物、起きてみたら瞼に吸い付いているヒル等全く別の世界にいる感がする。とても一人では通れまい。皆で通ると怖くないという心境だ。食糧もそろそろ底をついてきた。上り詰めて坂道を下る。目的地も近いようだ。あちこちに人の気配がする。

別れた無線班と大きな岩窟で再会することができて又暫く御世話になることになったが、食糧がないので山を降りて調達に行かねばならない。

これから九月二八日敵の軍門に降るまで、月日については詳細に記憶していないので、月日の記入を省略する。

バナハオ山から四〇㎞くらいの所に村落があるが住民は逃げてしまっていない。

日本兵が山に逃げてゲリラ作戦をしていることをキャッチして、殆ど集団生活を行い警戒を強めて山から遠く離れている。

五月末から六月上旬にかけては鶏や水牛を容易に捕らえることができたが、だんだん遠くへ行かないと捕獲不能になった。結局自分達が計画をたてていなかったので苦労することになった。

六月中旬頃、第十三戦隊第一中隊長藤堂中尉が兵団長命令で各部隊に転属になっている戦隊員を掌握して遊撃隊を編成することになり、私も無線班に別れを告げて二ヶ月ぶりに古巣の戦隊にもどることになった。

民家から持ってきたトタンニッパー、木の葉で雨露をしのぐだけのニッパハウスを造り居住することになった。

毎日の日課と言えば三人一組で調達班を編制し食糧確保のために山を降りることだった。

一中隊の木内軍曹（北海道出身　七月六日戦死）、第二中隊の宇田軍曹（大阪出身　七月五日戦死）と私の三人であった。木内軍曹が分隊長役であった。

調達班として活躍しているとき海軍の織田兵曹長（四国出身）の組と仲良しになった。食糧がないときは持ちつ持たれつ、タピオカ、バナナ、塩等を分けて貰い大変助かった。

多分月足軍曹も一緒に行ったと思うが、二組くらいで水牛七頭を山の中まで連れてきたときは痛快だった。

水牛は一見従順そうににみえるが、一旦気分を害すると和牛よりこわい。扱い方を知らないで、前にいけば角で突かれることを想定して、後から棒でやわらかにたたいて。ゆっくり、ゆっくり進む。いつもの三倍も四倍も時間をかけて漸くたどり着いた。

戦隊だけで食べるのはとうてい無理なので、各部隊に分配し、久しぶりのステーキにありつけ喜ばれたことは言うまでもない。

早速兵団の評判になり、兵団長が水牛の肉に味をしめたのか、自ら戦隊に来て「肉は有り難う、兵団長は最近甘いものに飢えているので、砂糖又はチョコレートでもよい、糖分が欲しいので今度は是非甘いものを頼む」こっちだって欲しいのは山々だが命がかかっている。軍の上層部の将校は何を考えているのかわかったものではない。

バナハオに転身後三ヶ月、そろそろ食糧事情も逼迫し、調達する地域も遠距離になってきた。手ぶらで帰ることもあるし、何日捜しても食べる物にありつけなかった時もある。犬は勿論、猫、蛇、猿、カタツムリ、油虫何でも食べた。

一週間も獲物が無く、最後に馬を捕まえて帰った。しかし一週間も留守にしていて帰らなかったので隊長に叱られた。

私は六月までは元気であったが、七月に入りマラリアが再発し、高熱に悩まされたうえに、アメーバ赤痢にかかり、そろそろマラリアが下火になると、今度は左足のくるぶしの上に潰瘍ができて身動きができず、寝たきりになった。半ば過ぎてからも、ものすごい下痢が続き、血便が出るようになった。

一日十数回便所に行く、便所は造ってないのでハウスから遠く離れた所や少しくぼんだところを選んで用を足す。夜中は真っ暗のため、戻ることはできないのでそのまま夜露にうたれて夜を明かすことがたびたびだった。自らの精神力で体力を保持しながら時のたつのを待って自然治癒させるより他に方法はなかった。

水牛を殺した後血を貰って飲んだり、血を煮詰めて少しでも栄養になるようにと祈る気持ちで食べた。

ちょうどその頃海軍の織田兵曹長が果

物やタロイモを持って見舞いに来てくれた。野戦での見舞いなど考えてもみなかったことで非常に嬉しかった。兵曹長のその後の消息は今もってわからない、残念である。

元気なとき、仲のよかった、木内、宇田軍曹も食糧調達に出掛け戦死したことを聞いた。

足の潰瘍が酷くなってきた。一応軍医に診察して貰い、ガーゼに赤チンをつけて押し込む。痛いことと云ったら飛び上がらんばかりだ。二、三日してガーゼを引き出すと腐敗し、濁った汁が出て何とも云えない異様な臭いが鼻をつく。すねの白い骨がみえてずきずきと痛む。都合によっては切断せざるを得ないかと心配になる。

皆が徴発に出て精一杯戦っているのに一人寝ているのも気が引ける。だからといって動くことは不可能だ。皆の情けにすがるより仕方がない。夕食後の雑談で「どうせ上野は死ぬのだから喰わせなくともよい」と声が聞こえてくる。さもあらん。私自身もそう思っていた。

八月も半ば過ぎた頃、それまで間断なく聞こえていた飛行機の爆音や、砲爆音がなくなり、何となく静かになってきた。

月末になると確実な情報が方面軍から振武集団、藤兵団を通じて各部隊に伝わってきた。

内容は八月十五日天皇陛下がポツダム宣言を受諾され、日本は無条件降伏し、戦争は終わったと言うことだった。

長い長い間苦しかった戦争は終わった。国敗れて山河あり、吾々は帰還できる。故里日本がある。私は内心喜んだ。よしそれには体力つくりだ。絶対に生きるのだ。

吾々は九月二六日に投降することに決まった。九月に入り、正確なニュースをキャッチ以来マラリアは日に日によくなり、アメーバ赤痢の方も下痢の回数も減り、軟便に変わりつつあった。唯左足の傷はまだ腐れて白いうみがでる。

投降日が決定したので、命の保証は確保されたが、食糧の補給はない。相変わらず食糧調達に出かけねばならない。運悪く米軍やゲリラに発見され、銃撃戦となり負傷若しくは戦死する者もいる。皆が命がけで調達してきたタロイモ、さつまいも、肉等感謝しながら頂く。

十日頃から毎日歩く練習をする。今日は五〇メートル、明日は八〇メートルと少しづつ距離を延ばしていく。木の枝で杖をつくる。着ているものはボロボロに破れた半袖の夏衣、膝から下は切れたズボンに戦闘帽、生まれたままのハダシだった。

どうしても生きて故国日本へ帰るのだと、ありったけの気力をしぼりながら、二週間ばかりたつと二〇〇メートルくらいは歩けるようになり、これで何とかいけそうだと自信がついた。

投降日も間近に迫り、軍隊手帳、極秘書類、米軍や比島の略奪品等はすべて焼却するよう命令があった。日本を出るときから持っていた、軍隊手帳、お守り、千人針、家族の写真は、輸送船が撃沈されたときか、マイナガ上陸後、バナハオ山転進までに紛失したものと思われ、私には何も焼くものはなかった。

きっと身代わりになってくれたのだと思うと、ほんとうに有り難うと心から感謝するばかりであった。

八，米軍へ投降、武装解除

二五日バナハオ山での最後の夕食を頂く、と言ってもサツマイモだけだ。だが皆に迷惑のかけっぱなしで生かしてもらった。有り難うと心から感謝するのみであった。

翌朝まだ暗いうちに目がさめる。思えば昭和一九年一〇月六日宇品港を勇躍出航して、本日昭和二〇年九月二六日に至るまで、三五五日、一日たりとも安堵す

ることなく生と死を常に念頭に置いて戦ってきた。漸く戦いは終わり生に対する万感の喜びが一気に溢れて、これからの人生に向かって新たに踏み出そうとする旅立ちの朝である。再び味わえることのない山での朝食をすませる。

五月下旬から九月下旬まで御世話になったバナハオ山に感謝しながら通いなれた山路に整列する。

山を下って村落のあるところ迄来ると、カービン銃を持った米軍兵士（一ヶ中隊くらいか）が整列していた。

日米両軍の指揮官の話し合いがおわり、行軍が開始された。約二〇メートル間隔くらいで米兵が両側を警備してくれる。

街の中に入ると道路の両側に比島住民が群がって、「ジャップパタイ、パタイ（タガログ語で「死ぬ」ということ）」と手を首に当て絞首刑のまねをし、石や物を投げて「バカヤロウ」と罵声を浴びせ、今にも叩かんばかりに近寄ってくる。

警備兵が銃を向けてこれを追い散らしてくれるが、その時の悲しさと、悔しさといったら筆舌に尽くし難いものがあった。

私は部隊の最後尾で皆より遅れがちになるので、黒人の兵士が特別に警備してくれた。三〇〇～五〇〇メートルくらい歩くと立ち止まり小休止する。その際住民から妨害されない様にと兵士も止まって護ってくれる。そんなことを十数回繰り返し、漸くトラックに乗車できる広い場所に到着した。ほんとうに長い長い道のりであった。

トラックに乗車して武装解除の場所であるカランバの俘虜収容所に向かった。

やはり道路の両側には住民がたむろして、一斉に「パタイ、パタイ、ジャップバカヤロウ」と叫んでいる。

約四年間の日本軍の植民地政策が如何に苛酷なものであったか、戦争が終わって平和がもどり、自由をかちとり、アメリカの自由主義と比較して雲泥の差があり、敗者である吾々に向かって、怒りと、腹立ちさをぶちまけているのだろう。

間もなく収容所に到着する。ここで、小銃、機関銃、刀剣類等の兵器を種類別において武装解除を終わる。衣服をすべて脱いで、米軍支給の服装（ランニングシャツ、カーキ色の上下服、布バンド、靴下、靴等）が支給され、これに着替えた。ただし上衣の背中とズボンの左右の膝の下にそれぞれ「ＰＷ」と墨書してあった。

又、食器類（フライパンに似た金属製のものに蓋がつき、湯飲みカップ、スプーン等）が支給された。

部隊は全部バラバラにされ、苗字のアルファベット順に再編成された。一つの幕舎に三〇から四〇人程度、皆初顔ばかり、一ヶ中隊は五〇〇人程度、中隊長は準士官または見習士官、将校は別の隊を編成していた。

テントの中は組み立て式簡易寝台を左右に置いて真ん中は通路、寝台の頭の方は所持品等を置いていた。

私はこのような状態で約一年間、（あちこち移動はあったが）昭和二一年一二月まで、収容所生活をさせられることになった。（収容所生活は省略）

九，復員、その他

昭和二一年一一月になると、急に帰国の話が出てきた。

一二月五日作業に行っていたマニラ近傍の貨物廠キャンプからカランバ収容所に移る。二三日の出発まで、種々の帰国準備をする。

昭和二一年一二月二三日マニラ港に碇泊中の米軍輸送船に乗船日本へ向かう。

一二月三一日佐世保市の南風崎（はえのさき）港に上陸、復員業務を終了して、懐かしの我が家へ帰ったのは一月三日夜のことであった。

記録にみる陸軍航空特攻と通信

大槻　健二

一　はじめに

特攻機の通信というと、最後の叫びを音声で…と、思い浮かべる方が中には居られると思う。情報通信の成熟した現代では仕方ないことかもしれない。枝葉末節の事と思われるかもしれないが、その実情はどうであったか紹介するため、点在する航空特攻と通信に関わる情報を纏めることにした。

二、航空特攻における「通信」とは

〈見えた　見えたぞ
椰子の葉かげに
機動部隊の　メリケンが
そうだ突撃　別れのキィを
打ってにっこり　若桜
轟沈　轟沈　空から　轟沈
（『消耗人間』）

陸軍の空中勤務者の場合、単座機では操縦者自らが、複座以上の機種では専門の通信士が通信を実施する。航空機による対艦船特攻にあっては、右に掲載した、第一一三振武隊員の手記に掲載された歌の中にある「別れのキィ」すなわち突入時のトン・ツーの組合せによるモールス信号こそが特攻隊員の最期の通信なのである。

まず導入として、特別攻撃隊の運用者側の回想手記を挙げる。これにより特攻の通信に関して概要を把握できると思う。

①　第六航空軍司令官の手記

福岡に軍司令部を置き、司令官として沖縄方面の陸軍航空作戦指揮にあたった菅原道大中将は次のように回想している。

※　※　※

身命をなげうって敵の艦船に突入する特攻隊員にとって最大の関心事は戦果の確認であったろう。特攻隊員は平素口癖のように言っていたようである。〃空母に躰当たりするのだ〃〃戦艦と心中するのだ〃と一対千の効果にあこがれていた。これが彼らの希望であり夢であった。その自己の身命の代償によってあがなった戦果が誰にも知られずに、永遠の闇に葬られるとしたら、彼らにとってこれ以上の苦痛はないであろう。軍は戦果の確認には特に意を注いで、その万全を期したが実施は必ずしも完全にはいかなかった。戦果を確認することは至難な仕事であった。誘導機を付し、戦果視察機を伴った初期においてはともかく、援護機を欠き、偵察機の援護を要するようになってからは、軍としてはおおむね左の方法を併用した。

1　状況許す限り偵察機（司偵）等による偵察。

2　各振武隊の隊長機に無電機を備え付け、簡単な信号を定めて戦場到着、攻撃開始を報告させる（隊長機事故あれば無報となる）。

3　現地三十二軍の展望視察による戦果通報を受ける。

4　無線電話の傍受（米軍は電話無統制で特攻機が来襲するや騒然となり、消火、救急など普通語をそのまま使用するので、これを傍受した）

右は当日中に収集され、報告の資となるのであるが、重複混淆を免れず、自然戦果過大に陥るのもやむを得なかった。爾後、敵総合報告電報の傍受、敵側の公表、大本営から通報される各国情報等により修正確定するのであるが、翌日または次回に出動する特攻隊員にとっては士気振作上、その日その日の戦果を詳細に知りうることを望んだが、なかなか希望は達せられなかった。（防衛研究所所蔵『特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官としての回想』）

②　第六航空軍通信参謀の手記

次に掲載するのは通信参謀の職にあった岡本豪少佐の回想手記である。実際に通信運用に携わった担当者としての具体的な解説である。

※　※　※

一　特攻機の通信

昭和二十年四月一日沖縄に上陸を開始した米軍に対して反撃する沖縄本島の陸軍部隊に協力して、九州の知覧、万世、

大刀洗および板付の各飛行場から沖縄上陸部隊掩護の米軍艦艇を主目標として、数次に亘る航空特別攻撃隊の出撃がおこなわれた。航空特別攻撃隊に出動する各飛行機は機体諸共目標を爆砕する爆弾装備を主とし其他の装備は一切取外されたが無線送信機のみは戦果確認を主目的として装着された。

二、実施の概況

１　準備

攻撃隊の毎出動の度にその出動に先立ち第六航空軍司令官菅原道大中将は幕僚を従え発進基地に赴き、隊員の家族に挨拶し、出動隊員を激励して訓示を与え、またその離陸を見送った。

菅原軍司令官に随行する幕僚は主として作戦参謀川元浩中佐、岡本豪少佐で時として岡本参謀のみの時もあった。

岡本通信参謀は出動準備中の各飛行機の一機一機に対して自ら送信機の装着、電源の接続等通信可能の状況を点検し、また攻撃隊員に対し、通信符号を配当し、送信要領を示し、之を紙片に書いて各人に手渡した。

出動機多数の場合は補助員を動員したが、確認は必ず自身でおこなった。

それは軍司令官の心情を察し今から死地に赴く殉国の戦士に対し、此の世との御別れの瞬間迄打ち続ける通信に就いて通信参謀自身世話することがせめてもの幕僚の心遣いであると信じたからであった。

２　受信

発進した各攻撃機からの送信電波を受信するため、各発進基地の近傍の小学校の教室の一部を借受け発進機数に応ずる受信機と操作員を配置して臨時の受信所を開設した。

出動一機毎に与える通信符号はイロハ四十八文字の内の一字で、例えば「オ」を配当された隊員は電信符号・－・・・と書かれた紙片を見乍ら電鍵を操作して連続送字し、衝突直前の最后に電鍵を押続ける規約を定めた。

受信所では攻撃機からの送信電波を受信して時刻と共に記録し、その結果は軍司令官に報告されたが最后の連続音を聞き乍ら通信参謀は黙祷を続けた。

三、特攻機通信に関する考察

特攻機の通信は戦果の確認のために必要とする反面、その企図を暴露する欠陥を生じ、検討されたが、特攻隊員の精神的感作の上から実行に移された。

（防衛研究所所蔵『陸軍航空通信　明治四二～昭和二〇』）

③　第八飛行師団長の手記

台湾に司令部を置き「誠」の名を冠した特別攻撃隊を沖縄方面の敵艦船攻撃に出撃させていた第八飛行師団長山本健児中将は、次の様に回想している。

※　※　※

沖縄戦にそなえて、大体つぎのような攻撃要領をきめてあった。（中略）簡単な無線電話の略号をきめておき、「何々上空通過」「いまより突入」等の報告を、各機ごとにすること。この報告は、師団司令部の情報班で記録しておき、攻撃発進から突入までの航跡を研究し、つぎの攻撃のとき参考にする必要があったのである。

（『丸　エキストラ版９　あゝ特攻隊』）

※　※　※

航空特攻における通信の位置付け・概要が先に挙げた手記により戦果確認の方法の一手段であり、私的な意思伝達の手段ではない事がお分かりいただけたと思う。続いては関係者の手記を引用していく。

三、手記・記録に見る通信の事例

ここでは現場にいた当事者の手記や新聞記事を含む記録に見られる通信関係の事例を列挙していく。通信員を有する場合は特に記載することにしたが、複座以上は専門の通信士が打鍵するので長文の送信が可能だが、戦闘機や複座の機を一人乗りで操縦した場合は操縦者自らが送信するために簡易的な符号の送信だけとなるようである。

①対空無線隊員の回想手記

突入時の通信を実施することは即ち死を意味する。よってその実際を体験として語る事が出来る者は受信した側に限定される。そこで、対空無線隊員の手記二例を掲載する。

（1）都城飛行場の例

都城で攻機の戦果確認等を行っていた人物は、『都城疾風特別振武隊』に次の回想を寄せている。

「特攻隊の通信による戦果確認方法は、爆撃機や偵察機の無線機と違って戦闘機用機上無線機の出力は弱く、又受信機（地二号）の性能もあまり良くなく、加えて空界の状況（電波）も悪く、その為混信と雑音の分離がよく出来ず、特に五月以降深い地下壕の中で受信しましたので更に感度が低くなり、突入予定時刻になっても目標信号（艦種信号）発信者（機）信号、降下突入サイン等は殆ど聞えず、時たま僅かに突入の電波連送（長音）らしき電波をキャッチしても瞬間のことであり、果たして特攻機よりの電波かどうかよく分かりませんでした。満足な戦果の確認も出来ず面目ありませんが、正直言って当時の戦闘機乗員の間には精神と操縦術重視、通信の軽視という傾向があり、特攻隊員の中にも通信軽視・通信技術未熟が多かった事は否定し得ぬ事実であります。まして、敵機や対空砲火の中で死に直面している特攻隊員が果して突入の瞬間電波を発するだけのゆとりがあったかどうか、恐らく電波を発しなかった者が何人もいると思います。」

また、同書の中には、関係者より集められた証言の中で、「この報告を受けることは特攻隊員の尊い霊に応える為にも又後の戦闘指導の為にも極めて必要なことであり、戦闘司令所には集められるすべての無線受信機を集めて発信を聞く努力をした。実際には相当多くの報告を受けることが出来たが、敵機の攻撃、猛烈な対空砲火の中に於ける通信である為、突入音（連続音）のみの通信も多かった。戦場の実相として止むを得なかったことであろう。」という記述も見られた。なお、報告の要素として次の四項目を挙げている。

1、自己呼名　姓の頭の一字
2、目標呼称　戦艦→セ　航空母艦→コ　等々
3、突進開始から連続音（キーを押し続ける）
4、連続音が切れた時刻を突入時刻とした

（2）万世飛行場の例

万世の第七二対空無線隊員は次の文を『陸軍最後の特攻基地』に寄せている。

「万世では主として振武特攻隊機の突入確認の無電受信を任務としておりました。ご存知のようにツーという発信音の途切れる時刻をもってその機（長機のみ発信）の突入（戦死）時刻としておりました。畔杭公園前？の空き地に受信機を据え、いまかいまかと突入無電を待ちうけましたが、突入予定時刻をとうに過ぎても感度がなく、もう駄目かとあきらめかけていたところ、突然かすかに、しかしはっきりとツーという音が耳にしていたレシーバーに飛びこみ、早速突入時刻を記入し上官に渡しました。

このときの感情はたとえようのない複雑なものでした。以来終戦まで多くの特攻機の突入確認作業に従事しましたが、はっきりと自信をもって確認できたという記憶がありません。彼等の悲痛な最後の声、死に水を取ることができなかったことについては、私共の技量の未熟に加え、種々の悪条件が重なったものだとは思いますが残念で自責の念にかられ、霊前にお詫びしても足らない気持ちで一杯であります。」

※　※　※

通信の規定は部隊や状況により様々であったと思われる。余計な考察は却って混乱を招くため、既存の記録・記事の列挙に留めておきたい。

②萬朶隊（九九双軽・通信同乗）記事

隊長機に通信士として乗る生田曹長が、残留するG兵長に無電の打合せをやってゐる。『よいか、ツツツーと打ってゐる

無電が途切れたその瞬間に俺の機が命中するのだから、最後の無電をよく聴いてくれよ。さうして、お前が今度攻撃するときもその要領でやるのだ。』

（『主婦之友』昭和二十年一月号）

③誠第一五飛行隊（九九双軽・通信同乗）

増田伍長手記

特別攻撃の無線は電波封鎖のため通話法も確定してなく、略号等も戦隊のものと同じで少し物足りない。通信将校馬場中尉は音像法の創始者であり国宝的存在であった。その人を特攻無線の指揮者に編入したことは大本営が台湾に全力を傾注していたとみて差し支えない、と思われる。（中略）偵察機の報告を待ち出撃待機、整備員もエンジンを最高の状態にして無線も司令部と完全に調整成り「テンノウヘイカバンザイ」の電文も調えて…

※音像法とは符号の暗記方法の一種

（『陸軍少年飛行兵史』）

●誠第一五飛行隊「特攻隊心得」より

澤田隊　特攻隊心得

（四）通信手ニ対スル注意

1　各機ニ通信ナク長機ノミナル故一層必通ニ之励ムベシ

2　隊長の意図スル所　必ズ全隊ニ亘ルハ一ニ通信手ニヨル、本特攻隊ハ特ニ無線手ヲツケラレシ所以ヲ考ヘ其ノ特色ヲ遺憾ナク発揮スベシ

（『偕行』平成八年二月号）

④第四五振武隊（屠龍・通信同乗）に関わる第六航空軍司令部附　参謀部勤務暗号将校の手記

藤井がどの艦に突入したかはさだかに判定出来ないが突入直前、藤井から「我今突入す、突入々々」と力強い無電が発信されたことは事実で、その目標が駆逐艦であったと司令部では確認していた。

（『歩兵第二連隊第三中隊支那事変戦史第二巻』）

※藤井とは隊長藤井一中尉を示す

⑤第四九振武隊（隼）記事

神鷲誘導に成功

「われ目標上空に到達す」の第一報をはじめ「われ上空に到達、十秒後目標に突入す」といふ打電があった

（『朝日新聞』昭和二〇・五・九）

⑥第五〇振武隊（飛燕）記事

「国土まもる若き神々とともに」

我れ突入す

哨戒機の爆音が縦横に大空を駆つて、着々薄暮攻撃の準備は進められていつた。出発の時刻の迫った頃、特攻隊兵舎に一人の通信兵が入つて来た。そして抱へて来た電信機を下すと静かに最後の打電方法を説明した。

「落着いて、しつかり打電してください。自分達は必ず皆さんの戦果をキャッチしますから。いゝですか。最初自分の名前を打つてツーツーツー、ツーツーツー、我れ突入す。最後はツーとそのまゝ長く引つ張ってーー」試しにと通信兵がジージージー、ジージージーと打つてみせられたが、一瞬シーンと静まつた隊舎の中に「ワレトツニフス」の電波が胸迫る感激を呼んで、誰も暫くは黙つたまゝ身動きもしなかつた。（『主婦之友』昭和二十年七月号）

⑦第五四振武隊（飛燕）古寺少尉手記

出撃準備の完了した整備兵は突入時の無線信号と機関砲弾が百発であることを伝え、特攻機から降り地上の人になった。

（『積乱雲』）

⑧六三振武隊（九九襲）久木田中尉手記

無線機は中隊長機⑪と小隊長機㉑㉛に装備していました。緊急時と突入時の合図をきめて使用することで。

（『あかねぐも』）

※菅原軍司令官の六月七日の日記には「成功を祈りし第六十三振武隊の薄暮攻撃は通信なし、惜可（惜しむべし）」の記述があり、司令部でも戦果確認のため通信を気に掛けていた事が分かる。

⑨第六四振武隊（九九襲）記事

国華隊、全機突入

無電の接受状況から推して殆ど全機突入というかつてない素晴らしい成功を報じ

基地に感激の凱歌をもたらした。（中略）まづ中城湾の巽少尉から「午後〇時〇分から〇時の間に突入す」と待望の飛電があつた、〇時〇分渋谷隊長機以下相ついで突入の尊い無電が入りいづれも殆どが突入に成功したことはほぼ確実と見られるにいたった

（『読売報知新聞』二〇・六・一四）

⑩誠第七一飛行隊（九九襲・通信同乗）記事

本記事は、誠第七十一飛行隊出撃に際し、同乗通信士の西義仲伍長が胃痙攣で倒れたことから、見送りに居合わせた対空無線隊の湯村泰伍長が咄嗟の身代わりを買って出た事を報じた記事である。

『よし俺が代りだ』病に倒れた戦友の同期生が突入

刻々と電信が入って来る〃天候逐次良好〃〃予定の航路通過〃　あゝ、この電鍵の癖は湯村だ、西伍長は電信機に貼りついた、〃全機士気旺盛〃〃〇〇飛行あと五分〃湯村有難う有難う、西伍長は気持の昂ぶりを抑へかねるかの如く通信所から出て行ったがすぐまた引返して来た〃目標上空に到達〃〃ク……〃長音と短音が不整規となつた、字をなさず辛うじて「ク」といふ字が分る、西伍長は思はず叫んだ「湯村が手をやられた、高射砲だッ、肘で叩いてゐるぞ」あゝ湯村が空母に突入しようとしてゐる、西伍長は親友の壮烈な機上負傷、必死の打電、果敢な空母突入を今まざまざと心眼で見たのだ

（『毎日新聞』昭和二〇・六・一七）

※湯村伍長については「特幹譜」（『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦』十三巻所収）によると、送信した電文は「トクカンイッキユムラタイ　イマヨリトツニウ」であったという

⑪第七七振武隊（九七戦）知覧飛行場における整備兵の手記

相花と、よもやま話をし、手をとって励ました。その時彼が無線機の不調を俺に訴えた。如何せん、灯火管制下の飛行場での無線機の点検は不可能と思ったが、一緒に飛行場にいった。九七戦が彼の搭乗機だった。口にこそ出さないが、これに爆弾と燃料補助タンクを縛着し無事に沖縄まで行けるかなと危ぶまれた。機上蓄電池（バッテリー）を使って無線機を点検してみたが受信は出来るが、送信は駄目だった。明朝四時の出撃で時間もないし、この暗闇ではどうする事も出来ない。相花の戦意失墜を恐れ「大丈夫だ聞け！この音を」通信所の電波を傍受して、レシーバーで聞かせた。受信だけ出来れば、基地からの連絡は分かる。俺は送信機の故障を彼には話さなかった。（申し添えるが、実は突入の際の声を通信所で受信して確認する事になっている。周波数によって誰の機か判別出来るのだ。）三時半に起床して、飛行場に行く。すぐに始動したプロペラの音がやけに哀愁をそそる。明けやらぬ空に星の光が淋しげにまたたく。彼の肩をたたき翼からとび降り敬礼し、彼との別れの挨拶をした。（中略）嗚呼、通信所で待ったがついに彼の最期の声は受信出来なかった。

（『陸軍少年飛行兵史』所収「班長奮闘記」）

※「相花」は隊員の相花信夫伍長

⑫在知覧、第二四四戦隊長小林少佐の手記（一五九・一六〇振武隊関係）

六月九日　一五九、一六〇振武隊出撃。誘導機先行し見事に成功す。高島・瀬田・佐々木・豊島ら全員成功せり。うれしさいわんかたなし。愛する部下の振武隊出撃に、必成を祈り指導す。全機突入の無線入り来り。大いに安堵するとともに、神たりし高島以下の英霊に対し合掌せり

（『ひこうぐも』）

⑬第三〇三振武隊（一式双練・通信士同乗）東山中尉の手記

通信員は、最小限「〇〇時〇〇分、我レ目標発見ス。位置、〇〇起点〇〇度、〇〇〇キロメートル、敵兵力〇〇〇」と先ず敵発見の第一報を司令部へ打電する。続いて「我レ戦闘機ノ妨害ヲ受ク。対空

砲火熾烈ナリ。〇番機自爆」というように、敵の妨害や我が方の損害を報告しなければならない。いよいよ目標に接近するや、「第三〇三振武隊　突撃準備隊形ツクレ。目標・・・一番艦」、続いて「第三〇三振武隊、突撃隊形ツクレ」「第三〇三振武隊全機突撃セヨ」のように隊長の発する命令を次々と発する。司令部へは「我レ、タダ今ヨリ突入ス。目標〇〇、機数〇機」と打つ。この頃には飛行機は翼を翻して反転し、突進を始めている。通信員はここで「リイヒ、リイヒ」と略号で打ち、続いて、無線機のキイをグッと握りしめて、長符ツー音を連続発信する。この「リイヒ、リイヒ、ツー」こそ我が第三〇三振武隊の突入信号である。（中略）本間伍長はどんなに激しい突入運動をしていても、無線機にしがみつきながら私が操縦席で怒鳴ることばを直ちに数字の暗号に直して打ち続ける事ができるようになった。そして「リイヒ、リイヒ、ツー」の突入信号は「死んでも打ちます!!」と胸を張って答えるのであった。（『生と死の谷間で』）

⑭第四三三振武隊（二式単高練）大塚少尉遺書

母上様　明日いよいよ出撃します。（中略）明日我が隊で無線による連絡の任務を自分がすることになりました。「我突入す」の最后の無電を。要は必ずやりますよ。（『万世特攻隊員の遺書』）

⑮部隊不明　火野葦平氏の記事

振武隊出撃　基地にて　火野葦平

私は全身を耳にして受信機を両耳にあてゐた、受信機をかけないでゐると、しいんとしてゐるのに、ひとたびかけると戦争の凄壮さを象徴するやうなさまざまの空間の物質が受信機をとほして耳のなかにながれこんで来る、素人のかなしさで、どれがほんたうの信号なのか、見当が立たない『もう、入って来る頃ですがね』振武隊が沖縄戦線上に到達する時刻に、無電通信所に入った私たちはその成果いかにと緊張した

『われ敵の攻撃を受く』

と一度は言つたきり、その後いつまでも入らないので、ひとかたならず心配であつた、全機、敵に突入すればその戦果は莫大で沖縄決戦の彼我戦勢を転換し得ることになる、まことに皇国の興廃を決する戦がこの数時間にかかつてゐる

ピーピピピ、ピーと入る音、じじじじといふ音、プツプツと鼓膜をたたく音、さまざまの音のなかにかすかに、特攻隊からの信号と私は胸音高鳴らせて緊張した。聞きなれぬ音を必死な思ひでとらへようと私は信号符号表をにらんで、耳をそばだててゐた

（中略）

多くの通信兵たちが必死の面持で今か今かと信号の入るのを待つてゐた、なかなか入つて来ず、電動機の絶え間ないひびきのなかに、私が受信機を耳にしたのは天翔隊の分で、愛機にまたがつた須山少尉の姿がまざまざと眼前にうかんで来た、この瞬間に、一機づつ、敵艦船に突入するのかと昼間見た若々しい勇士たちの顔がつぎからつぎに思ひだされて来る

『われ突入す』といふ信号がきたときが最後である、しかしその最後はまた彼らが永劫に生きる最初のときでもあるのだ、私はしばらく受信機を耳にして信号を実際にきくことの苦しさに堪へかねて、機械を外した、いつか顔が火照つてゐた、全機突入に成功するやうにと、眼をとぢてただ祈つた

（『西日本新聞』昭和二〇・五・二八）

⑯部隊不明　振武隊取材記事

お人形首にかけ『さあ征かう』神鷲淡々、出撃の会話

これは振武特別攻撃隊の出撃直前における神鷲達の会話である、私はそれを自然のうちに拾ふやうにコッソリと蒲団の中で速記した、文章は全然修飾へ加えず一字一句ことごとく神鷲達の語った通りにした（中略）

『突入の無線は知つてゐるだらうな』

『知つてゐますよ、ツートツー、ツートツーで最後はツーとぶち当るまで引つ張ればいゝんだ』
（『毎日新聞』昭和二〇・六・一一）
※ツートツー（ー・ー）は「ワ」である。彼の姓の一字なのかもしれない。

⑰ご遺族の手記に見る通信

最後の事例として、第五五振武隊長黒木國雄少尉の父・肇氏が綴った手記を、お許しを得て転載させて頂くことにした。黒木少尉は出撃時、知覧飛行場にて父の見送りを受け、父は突入時の無線を自ら聞くという、非常に衝撃的な体験をしている。通信が切れた時が息子の命の終る瞬間なのである。この父の心情は当事者でなければ到底表現し得ないものであろう。

※　※　※

國雄、私のそばに来たり。
「父ちゃん、國雄の晴れ姿見て嬉しいじゃろ」
「おお、嬉しい、喜ばしい。母ちゃん皆にもいいお土産ができた。しっかり頼むよ」
「征きます」
これが最後の言葉。この時が最後の敬礼となりぬ。（中略）上空、遠々、点々と見ゆ特攻機に、また伏し拝み、戦場まで無事着、全機突入のできまするよう、神々に祈願合掌したり。ああ涙なし、無言。万歳あるのみなり。
横手少尉と戦闘指揮所の無電室に至り、午前八時四十二分、第一突撃隊、突撃開始。我突入の無電を聞く。これ最後なり。昭和二十年五月十一日午前八時四十二分なり。最後の我突入の無電を聞き、三角兵舎に帰る。
昨夜、本朝まで在りし、神々の姿なし。ただ今の数時間前の出来事想起され、一抹の寂寥を感ず。
國雄名残の品、整理しながら、その香を嗅ぎ、「父ちゃん、晴れ姿見て嬉しいか」と、あの最後の声を繰り返したり。
横手少尉に慰められ、（中略）「今回の出撃に父から見送ってもらい、また最後の突入の電まで見聞き届けられるとは本当に黒木は幸福ものでした」と。
また、報道員の方よりも「出撃に立ち合われる事は最近少なく、良かった」と。皆様よりありがたき言葉。これも國雄のお陰なり。（中略）サラバ國雄、最後の地知覧よ。また父は来るよ。

※　※

黒木少尉は自らの最期を父親が通信を介して見守っていることを知って飛び立ったのだろうか。父の心境は、と想像すると胸が苦しい。

五　おわりに

「特攻」は現代において時としてある目的を達する前提で利用される事が多々ある。そのような中には事実を無視した発信者の都合の良い主張も散見される。「特攻隊員の最期の通信」とされるものの中には「突入の際にはお母さんと叫んだ」等の信憑性に欠ける主張もあり、感情的な理由もあってか解け難い誤解を生んでいる。「特攻」という人間の生死に関わる上で、軽々しい憶測は厳に注意すべきではないだろうか。

【資料】振武隊戦闘概要に見る通信

この戦闘概要は功績上申等、人事上の資料として作成された文書と推測するが、通信の有った場合には報告内容を、通信の無い場合は「所命ノ如ク特別攻撃ヲ決行セリ」等、簡潔に締めており、戦果欄に不詳の記述も多い。正確性は不明だが、司令部に報告された記録であり、貴重な情報である。紙面の都合で関係事項のみ抜粋した。カッコ内は昭和二十年を省略した月日と機種、機数を表示している。第三章の事例に有る無線報告が記録されてはいないというケースもあるので確認頂ければと思う。

第一特別振武隊（四・六、疾風八）「分解突入」ノ無線傍受ニ依リ突入自爆セルモノト確認ス

第一九振武隊（四・三〇、隼五）無線ニ依リ艦船ニ突入ヲ報スルモノ二機敵信傍受ニ依リ突撃成功セルモノ二機ナリ

第二七振武隊（六・二二、疾風六）

○七・○一屋久島○七・四六奄美大島通過○七・五八～○八・○九ノ間徳之島以南空域ニ於テ敵機ノ攻撃ヲ受ケタルモ全力ヲ以テ之ヲ突破シ○八・一五～○八・三○ノ間所命ノ如ク特別攻撃ヲ決行セリ全機左ノ通リ突入ヲ報告セリ

巡洋艦　一機
駆逐艦　一機
艦船不詳　九機

第三六振武隊（四・二七、九七戦一）無線報告ニ依リ突撃成功セルヲ確認ス

第四〇振武隊（四・二七、九七戦六）其ノ無線報告ニ依リ突撃成功セルヲ確認ス

第四三振武隊（四・一二、隼三）其ノ無線報告ニ依リ一四二〇―一五三〇ノ間突撃成功セルヲ確認ス

第四九振武隊（五・一一、隼二）　無線ニ依リ○八・三○―○九・○○ノ間突撃ニ成功セルヲ確認ス

（五・二五、隼二）無線ニ依リ○八・三○―○九・三○ノ間突入ニ成功セルヲ確認ス

第五三振武隊（五・一八、隼八）　装備セル無線ニ依リ一九・一○～一九・二○ノ間ニ於テ巡洋艦其ノ他ニ突入セルヲ確認セラル

第五四振武隊（五・二五、飛燕五）無線報告ニ依リ突撃成功確認ナリ

第五六振武隊（五・一一、飛燕三）無線報告ニ依リ突入成功確実ナリ

第五七、五八振武隊（五・二五、疾風一一）　無電ニ依リ左ノ通リ突入ヲ報ス

（第五十八振武隊十名ヲ含ム）

航空母艦ニ対シ　二機
戦艦ニ対シ　一機
巡洋艦ニ対シ　一機
駆逐艦ニ対シ　一機
輸送船ニ対シ　一機
艦船種不詳ニ対シ　四機

第五八振武隊（五・二八、疾風一）　無線報告ニ依リ敵艦船ニ突入ヲ確認セラル

第五九振武隊（六・八、疾風六）○八・○五輸送船発見　○八・○六輸送船突入一機　○八・○七艦種不詳突入三機　○八○八戦艦及艦種不詳突入各一機ノ報告アリ

第六〇振武隊（五・四、疾風七）○八・三二平柳少尉、田中伍長ヨリ突入、同時柴田少尉空母突入、○八・三○駆逐艦突入、不明機○八四二吉水伍長駆逐艦突入ストノ無電報告アリ

第六四振武隊（六・一一、九九襲九）無線報告ニ依リ突入セルコト確実ナリ

第六九振武隊（四・一六、九七戦一）其ノ無線報告ニ依リ一○、○○所命ノ如ク突撃ヲ決行セルヲ確認ス

第七九振武隊（四・一六、直協一○）其ノ無線傍受ニ依リ一○・○○頃突撃ヲ決行セルヲ確認ス

第一〇六振武隊（四・一六、九七戦一○）其ノ無線報告ニ依リ突撃成功セルヲ確認ス

第一〇八振武隊（四・一六、九七戦一一）無線報告ニ依リ大部ノ突入ヲ確認ス

第一一二振武隊（六・三、九七戦九）無線報告ニ依リ突入成功確実ナリ

第一四四振武隊（六・八、隼二）　無線ニ依リ突入ヲ報告セシヲ以テ突入成功確実ナリ

第一五九振武隊（六・六、飛燕五及び六・一一、飛燕一）無線報告ニ依リ突入成功セルコト確実ナリ

第一六〇振武隊（六・六、飛燕四）　無線報告ニ依リ突入成功セルコト確実ナリ

第一六五振武隊（六・六、飛燕五）　無線ニ依リ突入成功セルコト確実ナリ

第一七九振武隊（六・二二、疾風五）全機左ノ通リ突入ヲ報告セリ

巡洋艦　一機
駆逐艦　一機
艦船種不詳　九機

第一八〇振武隊（七・一、疾風二）○八三一駆逐艦ニ突入一機ノ無線報告ヲナシ所命ノ如ク全機突入ニ成功セリ

第二一四振武隊（六・三、九七戦四）無線報告ニ依リ突入成功セルコト確実ナリ

（六・一○、九七戦一）無線報告ニ依リ突入成功確実ナリ

（防衛研究所所蔵『戦闘概要　昭和』より引用）

おわり

神雷部隊と第14期海軍飛行専修予備学生

水交会　小田部哲哉

筆者の母方の伯父石塚隆三は学徒動員で海軍に入団し、海軍第一四期飛行専修予備学生となり、谷田部航空隊（谷田部空）で操縦専修戦闘機訓練を修了し、昭和二〇年六月二二日に鹿屋基地から第一神雷爆戦隊として出撃して「必死必殺の体当たり攻撃を決行」した。（注：以下、飛行専修予備学生の期間及びその後も含め、一四期生という）

筆者が小学生時代に母の実家に行くと、飛行帽を被った伯父の写真が飾ってある部屋に「猪口力平・中島正『神風特別攻撃隊』」があった。この本で伯父が神雷部隊爆戦隊の一員だったことを知った。

それから約五十年経ったある日、インターネットで水交会湘南支部が鎌倉市の建長寺で神雷部隊の慰霊祭を行っていることを知った。当時の水交会湘南支部長は仕事で存じ上げていた海上自衛隊ＯＢの方だったので、翌年から慰霊祭に参列させて頂き、水交会にも入会した。

慰霊祭に参列して、慰霊碑を見ると第七二一海軍航空隊（七二一空）の桜花隊、攻撃隊、爆戦隊（建武隊等）の隊員だけでなく筑波空、元山空、大村空、谷田部空（注：以下、この四航空隊をまとめる場合、筑波空等という）の特攻隊員も神雷部隊として祀られていた。

それまで神雷部隊は七二一空だけだと思っていた。なぜ七二一空とは別の航空隊である筑波空等の隊員が神雷部隊として出撃したのか。そして、どのようにして一四期生が筑波空等から神雷部隊として多数出撃したのか。これを調べた結果が本稿である。

なお、本稿は一四期生遺族会の機関誌「第十四期遺族会短信」第三号　令和二年三月に掲載したものに加筆変更をしたものである。

一　先ず、水交会湘南支部が建長寺で行っている慰霊祭について説明しよう。

神雷部隊の慰霊祭としては鹿屋市が行っている旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式が有名であるが、これは神雷部隊以外の特攻隊も対象としている。それに対し、建長寺の慰霊祭は神雷部隊だけを対象としている。

建長寺の神雷部隊慰霊祭は、神雷部隊桜花隊隊員だった建長寺境内の正統院の先代住職竹内行康氏がほかの神雷部隊隊員とともに正統院墓地背後の洞窟に慰霊碑を建立したことが始まりだった。昭和四〇年三月二一日の除幕式には神雷部隊関係者とともに、海軍の従軍記者として鹿屋基地で神雷部隊を取材していた山岡荘八氏、川端康成氏も参列した。この日は桜花の初陣である第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊が出撃して二〇年になる日だった。このときは建長寺が独自に慰霊祭を行った。

その後、水交会（最初は鎌倉支部、平成一四年からは湘南支部）が毎年三月二一日に慰霊祭を行うことになった。水交会は戦前の「水交社」の伝統を引き継いだ組織で、慰霊顕彰は重要な事業である。水交会として靖国神社で月例参拝を行っているほか、全国一一の支部が各種慰霊祭を行っている。湘南支部の神雷部隊慰霊祭はその一環である。

慰霊碑は、平成五年一〇月一日にステンレス製の「神雷戦士之碑」、「神雷部隊戦没者芳名」、「あゝ　火箭の神々　神雷特攻隊を讃う（火野葦平：昭和二〇年六月五日の朝日新聞に掲載）」の碑に改修され、現在に至っている。「神雷部隊戦没者芳名」には連合艦隊の布告を受けた特攻隊員七一五柱とともに戦死・殉職した一一四柱も含めた合計八二九柱の氏名、出撃年月日、出身地等を刻んである。このうち一四期生は八二柱である。

二　神雷部隊は桜花と一式陸攻で有名だが、爆戦機も数多く出撃した。

（一）神雷部隊は人間爆弾桜花を運用した唯一の部隊だった。

桜花の開発は、昭和一九年八月一六日に海軍航空本部が大田少尉発案の人間爆弾に「㋐（マルダイ）部品」の名称を付け、航空技術廠に改良試作を命じたことから始まった。大田少尉は五月ごろから本案を上司に説明し、海軍内部で内々検討していたのだった。八月下旬、航空本部は「㋐部品」に「桜花ＭＸＹ七」と命名した。

これに先立つ八月中旬、第一線部隊を除く全国の航空部隊で秘密裏に「生還不能の新兵器」の搭乗希望者を募集した。九月中旬、桜花を基幹とする特攻専門部隊の編成準備委員を横須賀航空隊附として発令して、部隊編成の準備が整った。

一〇月一日、編成準備委員を中心として第七二一海軍航空隊（七二一空）が桜花特攻専門部隊として横須賀鎮守府隷下に百里原基地で新編された。七二一空が神雷部隊と呼ばれるようになったのは、一一月七日に神ノ池基地に移転したときに「海軍神雷部隊」の大門札を掲げたからだった。一一月一五日、神雷部隊は桜花の桜花隊、桜花を運搬する一式陸攻の攻撃七一一飛行隊（攻撃七一一）、これを護衛する零式艦上戦闘機の戦闘三〇六飛行隊（戦闘三〇六）を新編し、本部、整備・兵器・通信、主計等とともに新たな編制となり、それまでの横須賀鎮守府隷下から連合艦隊隷下になった。一二月一九日、神雷部隊は一式陸攻の攻撃七〇八を七六二空から編入して、桜花運搬能力を増強した。さらに、二〇日には神雷部隊と七六二空で編成した第一一航空戦隊（一一航戦）が連合艦隊隷下になった。

昭和二〇年一月二〇日、神雷部隊は神ノ池から桜花隊の第一陣、攻撃七一一の大部分、戦闘三〇六の全兵力を九州地区に進出させ、既に宮崎に展開していた攻撃七〇八と合わせて神雷部隊各隊を九州に集結させた。またこの日、桜花隊から戦闘機を分離して桜花戦闘機隊を新編した。二月一日、神雷部隊に戦闘三〇七を新編するとともに戦闘三〇五を二五二空から編入して桜花・一式陸攻を護衛する戦闘隊の増強を図った。このようにして神雷部隊は桜花作戦の準備を進めた。

また、戦況の変化を受けて、神雷部隊を取り巻く状況も特攻に向けて動き始めた。昭和二〇年一月一八日に最高戦争指導会議で全軍特攻化を決定し、翌一九日には陸軍参謀総長・海軍軍令部総長が今後の作戦方針「帝国陸海軍作戦計画大綱」を天皇に上奏した。翌二〇日、海軍はこの内容を「連合艦隊司令長官の準拠すべき作戦指導の大綱」として発令して、特攻の推進が決定した。二月一〇日、連合艦隊は連合艦隊隷下の一一航戦と第三航空艦隊（三航艦）の二五航戦解隊し、その兵力を基幹として五航艦を編成した。これにより一一航戦に所属していた神雷部隊と七六二空は五航艦隷下になった。二月一五日、神ノ池に残留していた七一一空要員を中心に七二二空（龍巻部隊）を新編して、三航艦隷下とした。三月一七日、連合艦隊は五航艦を中心とする第一機動基地航空部隊の主力を九州方面に展開させて、敵機動部隊を捕捉撃滅させることにした。

神雷部隊はこのように部隊編成を進め、特攻の準備を整えていたが、米軍の攻撃で損害が出てきた。二月一六日から二五日にかけて訓練先の神ノ池基地で攻撃七一一が空襲を受け、一式陸攻一三機炎上等の損害を出した。三月一八日、宇佐基地で攻撃七〇八の一式陸攻一一機炎上等の損害を出した。このようにして攻撃隊の能力が減少した。三月一八日から一九日、九州攻撃の米軍機を迎撃した戦闘三

○五、三○六、三○七が大きな損害を受け、神雷部隊の戦闘隊は桜花・一式陸攻を護衛する能力を大きく喪失した。三月二○日、戦闘三○五は機体、搭乗員が減少したため、搭乗員を二○三空に転属させたので、戦闘三○五は書類上だけのものになった。

このような状況にも拘わらず三月二一日が神雷部隊の桜花初陣の日となり、第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊が出撃した。攻撃七一一の一式陸攻は一八機で、そのうち一五機が桜花を搭載した。護衛戦闘機は戦闘三○六・三○七の一九機と二○三空の一一機、計三○機だった。しかし、途中で敵戦闘機の攻撃を受け、桜花・一式陸攻は全滅、戦闘機は一○機が未帰還で、合計一六○柱が一度に戦死した。

戦闘三○六、三○七も機体、搭乗員が減少したため、三月二三日に搭乗員は二○三空に転属となり、神雷部隊の戦闘隊は実質的に消滅した。同日、桜花戦闘機隊を桜花隊に復帰させ、翌二四日には桜花隊の隊員から爆戦隊の要員を募集した。

これ以降は、桜花・一式陸攻と爆戦機による二種類の特攻を行った。

（二）神雷部隊は本土から最も多く特攻機を出撃させた部隊だった。

表一の通り、日本本土から特攻出撃して布告を受けた搭乗員の爆戦機出撃機数は、神雷部隊は二九五機で各航空隊合計三四九機の八五％を占めていた。各機種合計出撃機数でも神雷部隊は三五○機（桜花・一式陸攻は桜花の機数で計算）で各航空隊合計九一三機の三八％を占めて最も多い航空隊だった。

神雷部隊がこれだけ多くの爆戦機を出撃させることができた要因は次の通りである。

・三月二一日の第一回桜花出撃で一式陸攻と桜花に大きな損害が出たため、その後は一度に多くの機数による桜花・一式

表１　布告対象者の日本本土からの出撃機数

（単位：機）

航空隊		戦闘機（爆戦）	爆撃、陸攻、艦攻	練習機	水上機	合計	機種
神雷部隊（721 空）		295	55			350	桜花、1式陸攻、零戦（55 機は桜花の機数）
戦闘機等	203 空 *1	5	0			5	零戦
	205 空 *2	17	0			17	零戦
	210 空 *3	3	10			13	零戦、彗星、天山
	252 空 *4	15	15			30	零戦、彗星
	601 空	14	57			71	零戦、彗星、天山
	小計	54	82			136	
艦攻・艦爆	131 空		9			9	天山
	701 空		60			60	彗星、天山
	706 空		5			5	銀河
	752 空		16			16	銀河、流星
	762 空		66			66	銀河
	901 空		1			1	天山
	931 空		10			10	天山
	951 空		1			1	99 艦爆
	宇佐空		81			81	97 艦攻、99 艦爆
	姫路空		20			20	97 艦攻
	百里原		35			35	97 艦攻、99 艦爆
	名古屋空		28			28	99 艦爆
	小計		332			332	
練習機	高知空			28		28	白菊
	徳島空			26		26	白菊
	小計			54		54	
水上機	鹿島空				2	2	零式水上偵察機
	天草空				9	9	零式観測機
	福山空				7	7	零式観測機
	北浦空				8	8	94 式・零式水上偵察機
	詫間空				15	15	94 式・零式水上偵察機
	小計				41	41	
合計		349	469	54	41	913	

（『特別攻撃隊の記録＜海軍編＞』等をもとに作成）
*1：戦闘 311 の 5 機が 701 空として出撃しているとの記録があるが、203 空の戦闘 311 の機体が 701 空の攻撃機を直掩したものと考えられるので 203 空に含めた。
*2：台湾からの出撃（零戦）を除く
*3：フィリッピンからの出撃を除く。
*4：サイパンからの出撃（零戦）を除く

陸攻特攻を控え、爆戦機特攻に重点を置いた。

・桜花搭乗員は戦闘機の操縦ができたので、航空隊内で爆戦隊（建武隊）をすぐに編成できた。

・飛行専修予備学生として教育・訓練を受けた戦闘機搭乗員が筑波空等で特攻隊を編制して、神雷部隊の指揮下に入り爆戦隊として出撃することができた。

なお、神雷部隊以外の航空隊は特攻任務とともに制空、爆撃、攻撃、偵察等の任務を持っており、特攻で戦死した搭乗員・機数は少なくとも、ほかの任務での損害は大きかった。沖縄戦以降の本土決戦に備えて戦闘機を温存する部隊もあり、結果としてこれらの部隊では特攻としての出撃は少なくなったとも言える。

三　神雷部隊爆戦隊では建武隊が八九柱なのに対して、筑波空等の出身者が一九六柱で多く戦死している。そして、この一九六柱には一四期生が多く含まれている。

（一）一四期生戦闘機搭乗員はどのような教程で教育を受けたか。

昭和一八年一二月九日から一〇日にかけて、徴兵猶予が停止されて学徒動員で海軍に入団することになった者が横須賀第二（武山）、大竹、佐世保第二（相浦）、舞鶴の各海兵団に到着した。入団式で海軍二等水兵を拝命した後、予備学生（飛行科、兵科、主計科）採用試験を受験した。

一九年二月一日、予備学生採用試験合格者のうち三、三二三名が飛行専修予備学生に任命された。このうち飛行適格者は土浦空で、飛行不適格者は飛行要務専修となり鹿児島空でそれぞれ基礎教程を開始した。なお、予備学生採用試験で受験者の約四〇％が不合格となり、不合格者はその後も兵として勤務することになった。五月三日、土浦空で操縦専修と偵察専修の区分発表があった。

六月一日、操縦専修者は陸上機（出水空、谷田部空、博多空、第二美保空）と水上機（鹿島空、北浦空、詫間空）に分かれて練習機教程に進んだ。使用機種は複葉機の九三式中間練習機（赤とんぼ）だった。

一〇月一日、実用機教程に入り、陸上機から戦闘機に進んだ者は筑波空（一二〇名）、元山空（一三七名）、谷田部空（一二〇名）（注：最初は神ノ池空だったが、神雷部隊が神ノ池基地に移動したため、神ノ池空が谷田部基地に移動して航空隊名を変更）の三個練習航空隊に分かれて訓練を行った。使用機種は零式艦上戦闘機とこれを複座にした零式練習用戦闘機だった。

一二月二五日、一四期生は少尉に任官したが、所定の教程の中途だったので、飛行特修学生としてさらに訓練を続けた。

（二）特攻部隊へ変化、神雷部隊へどのように組み込まれたか。

二〇年二月一六日、練習連合航空総隊司令官が第一一連合航空隊（筑波空、谷田部空等）、第一二連合航空隊（大村空、元山空等）、第一三連合航空隊に対して「主として特攻訓練を実施すべし、本概成期は四月末」と命令した。この時の特攻訓練完了目標人数は筑波空五〇名、谷田部空五〇名、大村空五〇名、元山空六〇名だった。通常であれば、実用機教程を修了した段階で各地の作戦航空隊に配属になるのであろうが、一四期生は実用機教程が中途で特攻訓練に変わった。

三月一日、練習連合航空総隊は教育を中止して解散するとともに第一一、第一二、第一三の連合航空隊を一〇航艦に改編して、連合艦隊に編入した。これにより、筑波空等は練習航空隊から作戦航空隊になった。さらに、一〇航艦は第八基

地航空部隊の指揮下に入った。

四月一日、連合艦隊司令長官は第八基地航空部隊指揮官（一〇航艦司令長官）に対して、作戦可能兵力を率いて、第一機動基地航空部隊指揮官（五航艦司令長官宇垣纏中将）の指揮下に入るように命令した。

四月三日、第一機動基地航空部隊指揮官は第八基地航空部隊の特攻隊展開基地を指定して、特攻隊各隊は展開基地到着時を以って展開基地航空部隊指揮官の指揮下に入るように命令した。これにより一〇航艦の筑波空等は五航艦司令部のある鹿屋基地に特攻隊を展開させて、五航艦の神雷部隊の指揮下に入ることになった。

これに先立ち、筑波空等は二月一六日の練習連合航空総隊司令官の命令を受けて特攻訓練を行うとともに二月下旬から三月上旬には特攻編制を完了させていた。これにより四月上旬から鹿屋の神雷部隊に特攻隊を送り込むことができた。

四月六日の菊水一号から筑波空等の特攻機の出撃が始まった。菊水作戦が始まったころは、筑波空が筑波隊、元山空が七世隊、大村空が神剣隊、谷田部空が昭和隊と航空隊ごとの特攻隊名で出撃していた。

三月二三日以来書類上だけとなっていた戦闘三〇六を四月二六日に筑波空等の特攻隊員の一部で再編した。一方、戦闘三〇七は五月五日付けで解隊した。

五月一一日以降、残る筑波空等の特攻隊員も戦闘三〇六の所属になったが、出撃時の特攻隊名は各航空隊のものを使用していた。しかし、六月二二日と八月一三日の最後の二回の特攻隊名は筑波空等独自のものでなく神雷爆戦隊となった。名実ともに筑波空等の特攻隊が神雷部隊に組み込まれたことになる。

（三）神雷部隊爆戦隊の戦死者のなかで一四期生は大きな比率を占める。

表二の通り、神雷部隊爆戦隊戦死者を出身別で分けると十四期生が八二柱で最も多い。一三期生は飛行科予備学生の各期を通じて戦没者総数及び総員に対する戦没者比率が最も高い。しかし、神雷部隊爆戦隊に関しては一四期生の方が一三期生の七四柱より多く、一四期生にとって厳しい状況だった。

神雷部隊の爆戦隊で飛行専修予備学生及び同予備生徒は大きな比率を占めていた。飛行専修予備学生及び同予備生徒は一六七柱（七四＋八二＋一一）で、爆戦隊全体二八五柱の五九％と半数以上である。

ただし、神雷部隊全体では二〇四柱（一一＋八二＋一一）で、全体の七一五柱の二九％だった。桜花一機出撃のために桜花・一式陸攻で八名が搭乗するが、桜

表２　神雷部隊　部隊別/出身別戦死者数

（単位：名）

区分	部隊		飛専予学13期	飛専予学14期	飛専予生1期	海兵	予科練等	合計
爆戦隊	721空	建武隊	17				72	89
	練習航空隊	筑波隊（筑波）	22	26		2	5	55
		七生隊（元山）	11	33		2	3	49
		神剣隊（大村）	13		11	1	23	48
		昭和隊（谷田部）	8	18		1	8	35
		神雷部隊爆戦隊	3	5			1	9
		小計	57	82	11	6	40	196
	中計		74	82	11	6	112	285
桜花・攻撃隊	桜花隊		11			1	43	55
	攻撃隊		24			10	331	365
	戦闘機隊		2			2	6	10
	中計		37			13	380	430
合計			111	82	11	19	492	715

（『特別攻撃隊＜海軍編＞』、『神風特別攻撃隊』、『海軍神雷部隊』、『学徒特攻その生と死 海軍第14期飛行予備学生の手記』等をもとに作成）

花・一式陸攻ともに未帰還になることが多かった。このため出撃機数に対して特攻隊員が四二〇柱（桜花五五＋三六五）と多く、そのうち予科練等の出身者は三八〇柱で神雷部隊全体七一五柱の五三％だった。

なお、一四期生は大村空で訓練を受けていなかったので、一四期生で神雷部隊として出撃したのは筑波空、元山空、谷田部空からの隊員である。大村空からの隊員は予科練等、一三期生、予備生徒一期生の出身者だった。

（四）一四期生の戦没者のなかで神雷部隊爆戦隊は大きな比率を占める。表二の爆戦機（練習航空隊）で戦死した一四期生八二柱は表三の戦闘機で特攻戦死した八二柱と同じ隊員で、戦闘機訓練修了者の全員が神雷部隊で戦死したことを示している。八二柱は戦闘機訓練を修了した戦没者九四柱の八七％、特攻戦死者一五九柱の五二％で、一四期生の戦闘機訓練修了者が神雷部隊で大きな犠牲を払ったことがわかる。

なお、一四期生戦没者数四一一柱の二〇％、戦闘機訓練修了者四四四名の一八％、一四期生総員三、三二三名の二％である。

表３　神雷部隊における14期生

（単位）：人）

専修別	機種	総員 人	戦没者数 人	戦没者率 %	特攻戦死者数 人	特攻戦死者率 %
操縦	戦闘機	444　*1	94	21	82　*2	88
	その他	698	97	14	45	46
	計	1,142	191	17	127	67
偵察・専修不明		874	60	7	32	5
飛行要務		1,307	160	12	0	0
合計		3,323	411	13	159	39

（『学徒特攻その生と死　海軍第14期飛行予備学生の手記』等をもとに作成）
*1：『学徒特攻その生と死　海軍第14期飛行予備学生の手記』p435から作成
P437では元山137名、筑波120名、神ノ池120名と記載されおり、本文ではこの人数を引用した。
*2：『学徒特攻その生と死　海軍第14期飛行予備学生の手記』p435では83人となっているが、ほかの資及び建長寺の慰霊碑が82人のため、本表では82人にした。戦闘機訓練を修了して特攻以外の戦没者は12人（94-82）で、いずれも筑波、元山、谷田部の各航空隊の出身だった。

四　おわりに

（一）建長寺の慰霊祭で抱いた疑問、すなわち筑波空等の特攻隊が神雷部隊として出撃した理由は、七二一空の下に筑波空等の航空隊自体が編入されたのではなく、特攻隊だけが神雷部隊の指揮下に配属されたものだった。海上自衛隊でいえば、護衛隊群の艦艇にヘリコプター航空群のヘリコプターが搭載され、ヘリコプターが護衛隊群の指揮下に入るのと同じ状況であろう。

（二）神雷部隊は桜花運用部隊として編成されたが、桜花の損害が大きく出撃の機会が減った。代わりに爆戦機を多用せざるを得なくなり、出撃機数は爆戦機の方が桜花よりもはるかに多かった。

（三）神雷部隊爆戦隊で一四期生の戦闘機訓練修了者が大きな戦力となったが、大きな犠牲を出した。

主要参考文献

一　猪口力平・中島正『神風特別攻撃隊』、二　蝦名賢造『海軍予備学生』、三　押尾一彦『特別攻撃隊の記録〈海軍編〉』、四　海軍神雷部隊戦友会『海軍神雷部隊』、五　海軍飛行科豫備学生・生徒史刊行会『海軍飛行科豫備学生・生徒史』、六　水交会『水交』、七　土居良三『学生特攻その生と死　海軍第一四期飛行予備学生の手記』、八　秦郁彦／伊沢保穂『日本海軍戦闘機隊　戦歴と航空隊史』、九　防衛研修所戦史室『戦史叢書　第一七回配本　沖縄方面海軍作戦』、一〇　茂木尚『学徒出陣の証言』、一一　渡辺徹・山下武雄『神風特別攻撃隊』

旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所（通称赤レンガ通信所）跡

会員　青木和子

日本最北端の街、稚内市は安政年間（１８４５～５９年）から北の要衝として重要な位置を占めており、文化５年（１８０８年）以来会津・津軽・秋田藩が警護に当たっていた。

明治８年樺太・千島交換条約により、宗谷周辺は国境となる。帝政ロシアが樺太に軍備を進めると、これに対応する国境の防備として明治35年北海道稚内市大岬に海軍望楼が建造され、日露戦争時にはバルチック艦隊日本海沖通過の監視・送信の役目を担っていた。

本隊は青森県大湊村（むつ市）で海上の北方水域における監視と通信、気象観測が主な任務で大正12年、「稚内海軍無線電信所」と改称。昭和５年望楼を大岬に残しクサンル（市内緑２丁目）に移って「大湊海軍通信隊稚内分遣隊」となり、無線電信の送受を任務とした。昭和６年には幕別（市内声問村恵北）に無線送信所の機能を分化させ、昭和12年「稚内海軍通信隊幕別分遣隊」として終戦まで使用された。敷地面積約６４００平米、施設は煉瓦造の庁舎２棟、燃料庫、石炭庫、官舎２棟、宿舎２棟、鉄塔、消防ポンプ室。士官10名、下士官兵50名が常駐していた。

赤レンガ通信所への進入路は立ち入り禁止で常時施錠されている。稚内市歴史・まち研究会副会長の熊田さんと待ち合わせて鍵を開けてもらい、そのまま自分の車で山道をそろそろと登った。少し進むと突然視界が開け、歴史を感じさせる煉瓦の建物が目に飛び込んでくる。現存する建物は３棟で、手前にある小さなＣ棟は展示資料室になっており、日本初の実用ストーブ「カッヘル」も備え付けられていた。最も大きいＡ棟は荒廃が凄まじく大きい地震があれば問答無用で崩れそうだ。崩落の危険がある為内部は公開しておらず、補強工事中である望楼を備えたＢ棟を見学させてもらった。床も天井も落ちてしまい、基礎がむき出しの室内を通って奥へと進む。地面も空も見え、風さえも感じるのに室内という奇妙な感覚だ。

旧軍の建物は総じて瀟洒だ。格子窓の桟までもが翡翠色に塗られた名残りがある。ラッタル仕様の木製の急階段を上り３階の望楼に着いた。昔はここから利尻島まで見えたそうだが、今は樹木が生い茂り、見えるのはわずかな周囲と敷地内にある鉄塔跡のコンクリート基礎、そして屋根が崩れ落ち小屋組みが露出したＡ棟だけだ。

北方海域における電波戦に対処していたこの施設は大本営と直結した送受信基地で、真珠湾攻撃開戦時の「ニイタカヤマノボレ一二〇八」の暗号電報はここからハワイ近海の機動部隊司令官・南雲海軍中将に中継打電されている。

また、栗林中将からの硫黄島最後の攻撃の決別電報を、涙をおさえながら傍受したのもこの通信所だった。

戦後はGHQが海難情報伝達を取り扱う海岸局として指定し、昭和34年まで米軍第11空挺部隊の一部、第1騎兵師団通信業務隊が駐留した。地域住民との交流は活発で、米兵達は祭典や運動会等の行事に参加したり、教員免許を持つ者は幕別中学校の教壇に立って英語の授業を行った。また、吹雪で鉄道や道路が通行止めの際には雪上車で住民を稚内市立病院まで搬送するなどしている。米軍の駐留と同時に逓信省も昭和23年から約３年間「稚内無線電信局」としてこの建物を使用した。その後昭和58年には防衛庁が管理、昭和61年には自衛隊名寄普通科連隊通信隊の所属のまま無人管理となり、平成18年に稚内市の所有となる。平成19年からは「稚内市歴史・まち研究会」がボランティアで管理活動を開始。歴史文化の広報活動として歴史巡りツアーやC棟での勉強会、桜の植樹や、平和祈念祭（毎年12月８日前後）を執り行っており、ユネスコの「プロジェクト未来遺産」にも赤れんが通信を中心とした『★未来人への贈り物★宗谷防人物語』として登録された。

目下の課題は建物の老朽化で、毎冬ごとに雪害による屋根部の崩落が止まらず、壁面を残すのが精一杯というのが現状だ。C棟は既に地元ボランティアにより修復は終わっている為、現在は地元企業の助成やクラウドファンティングを活用してB棟を補強・修復し、安全に内部見学ができる環境を目指している。

米軍駐留時の全景、背後に見えるのは利尻富士

連載山ある記10　山梨県「笠取山」

会員　池田　康博

多摩川の最初の一滴は、笠取山の水干（みずひ）という場所だと知って、是非行ってみたいと思った。笠取山は山梨県甲州市だが、埼玉県秩父市との県境に位置する標高千九百五十三ｍの山である。

中央道の勝沼ＩＣで降りて、国道４１１号大菩薩ラインをひた走り、鶏冠山登山口を過ぎた辺りで一ノ瀬高原の林道に入る。ＩＣから約１時間10分で登山口の作場平駐車場に着いた。ここは既に標高千三百十ｍである。

午前８時に登山口をスタートした。

笠取山（東峰）山頂

よく整備された登山道を、沢を十数回も渡り返しながらヤブ沢峠まで登ると、なんと林道に出た。水源管理専用なのか、一般車両は通行止めの林道をさらに約20分歩くと笠取小屋に着く。ここで小休止の後、再び登山開始、稜線を進み雁坂峠への分岐を過ぎると、こんもりとした小山が現れる。その頂きには「小さな分水嶺」と彫られた三角形の石柱が立っていて、傍の案内板に、「この嶺の東側に降った雨は荒川となり、西側に降った雨は富士川に、南側に降った雨が多摩川になる」と書かれていた。

小さな分水嶺

ここを越すとやがて目の前に丁度、スキー場の上級者用ゲレンデのような「壁」が立ちはだかっている。笠取山である。山頂まで続くこの山唯一の厳しい山道をジグザクにゆっくり登ってゆく。山頂部は岩峰（西峰）となっていて狭い。展望がきくのは西峰のみということだが、生憎この日はガスも掛かって周りは全く見えなかった。西峰より少し高い東峰は、狭い岩の尾根をよじ登って少し行った所である。強い風が吹き抜ける中、登頂時刻は10時８分、ここもやはり狭く長居ができるところではない。登頂の証拠写真を撮ったら早々に黒槐山（くろえんじゅやま）方面に、今度は急な下りを降りていく。そして、山頂から右へぐるっと回り込むように下った所、恐らく山頂からは二百ｍほど降った地点に、目指す「水干」があった。水干とは沢の行き止まりの意味だそうだが、水はここから一旦土の中に浸み込み、60ｍほど下で湧き水として顔を出し、多摩川の最初の流れとなっているそうだ。

水　干

しかし、この日、見た限りでは水溜まりに水はなく、水が滴っている様も見えなかったため、「最初の一滴」の場所確認に止まり、残念な気持ちで下山にかかった。また、ちょっと疲れもあったため最初の流れを確認する事もなく、途中、鹿や猿と遭遇しつつ、また、東京都水道局の職員達と挨拶を交わしながら駐車場に着いたのは午後１時前であった。

以前、甲武信ヶ岳で信濃川の“最初の一滴”を確認したのに続く、水源確認の山歩きであった。

顕彰会々員からの投稿です

コロナで閉塞感がありますが、この絵をご覧になって少しでも明るくなって下さい。
皆さん頑張りましょう。

冬が過ぎ桜が咲きました。そして藤の花の季節に!!

舞台『未来へつむぐ』を観劇して

評議員　原知崇

九月に世田谷山観音寺で開催された特攻隊年次法要の席上、ご参列の一般社団法人TSUMUGI JAPAN野田代表理事にお目にかかりました。

同法人では我が国の伝統や文化を世界へ紹介し国際交流を育み、日本の観光振興、地域の活性化を図る活動をされているそうで、その事業の中で陸軍振武隊をテーマにした演劇、『未来へつむぐ』を５年にわたり公演されています。野田氏はこの演劇の作・演出・総指揮を担当されてきました。

お誘いを受けて稽古場を見学にお邪魔しますと、皆さん若者らしく大変賑やかな様子。その熱気に圧倒されつつ、しばし準備の様子などを拝見しておりました。実は私も学生時代に少し演劇をかじった時期があり、その頃の懐かしい空気を楽しんでいたところへ号令一下、俳優は男女とも整列し直ちに列整頓、続いて厳粛なる不動の姿勢をとり、靖国神社のお札に対して深々と礼をされてから稽古に入られて大変に感心しました。聞けば世田谷山や知覧特攻平和会館でも研修を重ねておられるとのこと。私も持参した当時の戦闘機のジュラルミン部材を皆さんに手にとっていただいたり、所作や被服装備のことについて質問にお答えしました。

稽古中は、令和元年とはとても思えない引き締まった空気を感じました。特攻隊員役も、世話係のなでしこ隊役の女性も、教練練度が高いので見ていて違和感がない。静と動、統制のとれた動きが美しい。しかし、ここまで練度を高めても舞台の上でどれだけ反映することが出来るのか？　稽古を見学しているうちに気づいたのは、なるほどこの人たちは特攻隊員の皮相的な姿をなぞるのではなく、その精神性を探り、汲み上げていき、演ずるというよりは当時の軍人にそのまま自らを重ねようとまでしている……。その気魄がとにかく強く伝わって来て、公演が楽しみになりました。

公演は十一月二日から三日、目黒区中小企業センターホールで行われました。陸軍第二一三振武隊隊員であり、戦後は知覧特攻平和会館初代事務局長を勤められ、千三十六柱の陸軍特攻隊員の遺影を集めた板津忠正氏をモデルとしたお話で、野田氏がその生き様に感銘を受けて舞台化したそうです。豊かな時代になったとは言われるが、人間として何かが欠けている現代に悩む一人の女性の視点を借りて物語を辿っていきます。

隊長以下一人一人の出撃前夜がオムニバス的に語られていくのですが、この舞台の登場人物は決してお涙頂戴の「特攻隊員」というステレオパターンに縛られた悲劇の人物像とは限らない。それぞれ異なる将来の理想を持って成長してきた彼らが、戦争によって昭和の御代に、敢えて武士たらんとする姿を要求され、期待に応えようとする。そして悩み、歓び、焦がれ、葛藤する、一人一人まったく違う人間として丁寧に描かれているのに惹き込まれました。

物語の終盤で、ただ静かに飛行服を身に付けていく隊員達の背中を観客が見つめます。カポックを付け、縛帯を留め、飛行帽を被り鉢巻を巻く。やがて身支度を終えた隊員らは名乗りを上げ、乗機を駆り南の空へ出撃していく。残された者達が見送る。そんな場面ではまるで出撃風景を写した写真の中に観客全員が自然と入ってしまったかのような不思議な錯覚を感じました。

築き上げてきた自身の存在意義に区切りをつけ、命を捧げるのは誰のためか。どんな未来を想ってその身を投げ打つのか。演劇ですから脚本はありますが、私にはつむぎ出される台詞のひとつひとつが、俳優それぞれが懊悩し探し求めた答えであるようにも感じられました。

なお令和二年、『未来へつむぐ』は東京公演は無く大阪公演となるそうです。関西方面の方はぜひご観劇なさっては如何でしょうか。

一般社団法人 TSUMUGI JAPAN
http://www.tsumugi-japan.org/

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

●桜舞え　飛び征く君の　大空に
淳

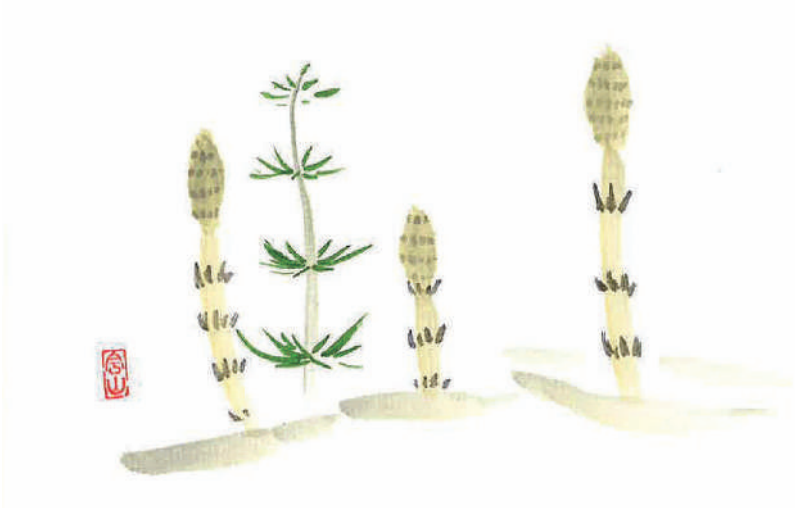
●こぼれずに　名も無き花よ咲きほこれ
今約束の　木の枝で
淳子

●春霞　富士の袴を　隠したり

●畑から　湯気立ち昇る　春日向
よみびとしらず

●み霊にも夏を告げよう柏餅

●ひらめかず謎も解けずに春おわる
井下駄マスオ



事務局からの報告等

第一回定時理事会（2・2・20）と定時評議委員会（2・3・13）において平成31年度の事業報告及び決算が承認され内閣府に報告したので会員各位にご報告します。

平成31年度事業報告書

一　慰霊事業

1　第40回特攻隊全戦没者慰霊祭

平成31年3月30日（土）11時より、靖國神社に於いて実施した。参列者は221名で、昨年を40名ほど下回ったが、済々と実施され、英霊への慰霊の誠を奉げることができた。慰霊祭後、遊就館前に有る「特攻勇士之像」への献花を行い、引き続き靖國会館に於いて顕彰会の状況説明及び懇親会を実施した。

2　第68回特攻平和観音年次法要

9月23日（月、祝）秋分の日の午後2時より、世田谷山観音寺に於いて、同寺と地元駒繋神社とによる神仏習合による年次法要が実施され、当顕彰会は同法要に全面協力をし、整斉たる法要の実施に寄与した。参列者は、例年並みの総勢215名であり、特に問題もなく整斉と実施できた。

3　各地慰霊祭への参列等

台風の影響で慰霊祭の中止等があったが、以下の41か所に代表者を派遣した。

（時期）	（慰霊祭名）	（場所）	（参列代表者）
3月21日	神雷部隊慰霊祭	鎌倉市北鎌倉	金子編集長
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都城市	原評議員
4月6日	鹿屋特攻慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	石井専務理事
4月7日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎県宮崎空港横	原島評議員
4月13日	鹿児島護国神社　創設150年祭	鹿児島県鹿児島市	藤田理事長
4月14日	萬世特攻慰霊祭	鹿児島県南さつま市	金子編集長
4月16日	出水市特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	福江評議員
4月21日	国分特攻基地慰霊祭	鹿児島県霧島市	岩崎副理事長
4月22日	靖國神社春季例大祭	東京都靖國神社	杉山会長
4月23日	特攻勇士之像慰霊祭	沖縄県那覇市	藤田理事長
4月29日	秋田県特攻隊慰霊祭	秋田県秋田市	岩崎副理事長
5日3日	知覧特攻慰霊祭	鹿児島県南九州市	岡部理事
5月11日	特攻勇士之像慰霊祭	福岡県中央区	福江評議員
5月12日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	石井専務理事
5月19日	若櫻の碑慰霊祭	三重県津市香良洲町	鮒田理事
5月19日	特攻勇士之像慰霊祭	京都府東山区	岩崎副理事長
5月26日	筑波海軍航空隊慰霊祭	茨城県笠間市	水町理事
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉県千葉市	岩崎副理事長
5月27日	哀惜の碑追悼慰霊式	鹿児島県指宿市	石井専務理事
6月2日	豫科練戦没者慰霊祭	茨城県阿見町	鮒田理事
6月8日	義烈空挺隊慰霊祭	沖縄県糸満市	石井専務理事
6月15日	特攻勇士之像慰霊祭	秋田県能代市	石井専務理事
7月6日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	藤田理事長
7月17日	錨地蔵尊御霊祭	山形県東田川郡	高松評議員

（時期）	（慰霊祭名）	（場所）	（参列代表者）
8月15日	十三塚原特攻隊慰霊祭	鹿児島県霧島市	倉形評議員
8月15日	全国戦没者慰霊大祭	靖國神社	杉山会長
8月25日	戦没学徒慰霊祭	広島護國神社	金子編集長
9月8日	高野山慰霊祭	和歌山県高野町	岡部理事
9月11日	市ケ谷台慰霊祭	防衛省市ケ谷駐屯地	水町理事
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭	長野縣護國神社	倉形評議員
10月18日	秋季例大祭	靖國神社	杉山会長
10月18日	秋季慰霊祭	千鳥が淵墓苑	杉山会長
10月19日	靖國神社創建１５０周年	靖國神社	藤田理事長
10月19日	明野忠魂塔慰霊祭	三重県伊勢市	倉形評議員
10月25日	神風特攻戦没者慰霊祭	愛媛県西条市	宮本評議員
10月25日	神風特攻隊慰霊碑参拝	比島マバラカット	岡部理事
10月27日	大東亜戦没学徒慰霊祭	靖國神社	及川評議員
10月27日	特攻勇士之像慰霊祭	大阪市住之江区	石井専務理事
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭	さいたま市大宮区	臼田理事
11月11日	回天大津島慰霊祭	山口県周南市	鮒田理事
11月23日	若潮の塔慰霊祭	香川県小豆島	金子編集長

二　護國神社への「特攻勇士之像」建立奉納事業

平成31年度は、宮崎・三重の両護國神社に奉納予定であったが、三重県については神社側の都合により令和２年度に延期になったため、宮崎懸護國神社のみへの奉納となった。この結果、平成31年度までで、全52か所護國神社等に対する奉納特攻像は19体となった。また、令和２年度以降の奉納に向けて、岩手、高知、広島、備後、姫路等の護國神社に対する説明も行った。今後も引き続き他の護国神社への説明を継続し、事前調整等準備を周到にして、多くの国民が、特攻像を見ることにより、特攻隊員に対する慰霊・顕彰の気持ちを持てるような環境作りに努力する。

三　募集広報

広報業務では、公益紙としての機関誌・会報「特攻」１２３号～１２７号の５ケ号を発行し、会員・協力団体及び希望者に配布・頒布した。また、平成31年は昭和19年に特攻作戦が開始されて75周年であることから、一般紙（産経新聞）に募集広告を２回掲載した。さらに、会の名称の普及、及び、若手会員の募集を狙って自衛隊向けの広報紙等に広告を出している。

四　会員の動向

新聞広告の効果もあり、平成31年度における新規入会者は昨年より54名増加の１４０名であった。一方、退会者は会費未納３年による会員資格喪失が２３６名と、例年の３倍近くにのぼり、これと逝去等による退会も併せて退会者が３４３名となったため、平成31年度末会員数は昨年度より２０３名減少し、１４７３名となった。

会員の減少傾向は、会の年齢構成から見れば今後も厳しい状況が継続するものと思われる。令和２年度は会の魅力化による会員のつなぎ止めに努めるとともに、役員等を中心として、特に若手会員の獲得を重視して募集業務に精励し会勢の挽回を期したい。

平成３１年度正味財産増減計算書

平成３１年１月１日から令和元年年１２月３１日まで

（単位：円）

科　　目	３１年度決算	前年度決算	増　減	備　　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	14,173,304	11,625,790	2,547,514	
特定資産運用益	550,000	327,500	222,500	
受取会費	3,482,000	3,362,000	120,000	
慰霊事業収益	2,254,500	2,453,000	△ 198,500	
出版事業収益	54,880	64,040	△ 9,160	
広報事業収益	10,600	8,000	2,600	
受取寄付金	4,195,331	5,321,108	△ 1,125,777	
雑収益	342	10,888	△ 10,546	
経常収益計	24,720,957	23,172,326	1,548,631	
(2) 経常費用				
慰霊事業負担金	764,810	1,276,418	△ 511,608	
像制作負担金	918,000	2,836,000	△ 1,918,000	
発送等委託費	3,946,663	1,561,023	2,385,640	
支払助成金	1,989,134	1,921,778	67,356	
役員報酬	300,000	400,000	△ 100,000	
給料手当	5,708,230	5,362,560	345,670	
福利厚生費	811,723	737,569	74,154	
旅費交通費	3,315,332	3,978,355	△ 663,023	
通信運搬費	557,812	492,984	64,828	
減価償却費	60,497	2	60,495	
消耗品費	857,250	729,422	127,828	
印刷製本費	1,000,461	1,019,666	△ 19,205	
会議費	173,000	248,374	△ 75,374	
光熱水料費	146,229	140,798	5,431	
賃借料	3,245,514	2,258,832	986,682	
諸謝金	195,000	177,106	17,894	
臨時雇賃金	760,000	336,000		
退職手当引当資産繰入	143,000	142,000	1,000	
経常費用計	24,892,655	23,618,887	1,273,768	
評価損益等調整前経常増減額	△ 171,698	△ 446,561	274,863	
有価証券売却損益	178,000	0	178,000	
基本財産等評価損益	18,435,416	△ 22,691,520	41,126,936	
当期経常増減額	18,441,718	△ 23,138,081	41,579,799	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
貯蔵品資産受入	0	0	0	
資産計上	170	120	50	
経常外収益計	170	120	50	
(2) 経常外費用				
特攻像台座	0	0	0	
貯蔵品資産償却	0	93,620	△ 93,620	
経常外費用計	0	93,620	△ 93,620	
当期経常外増減額	170	△ 93,500	93,670	
当期一般正味財産増減額	18,441,888	△ 23,231,581	41,673,469	
一般正味財産期首残高	274,728,461	297,960,042	△ 23,231,581	
一般正味財産期末残高	293,170,349	274,728,461	18,441,888	
Ⅱ 指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
Ⅲ 正味財産期末残高	293,170,349	274,728,461	18,441,888	

事務局からの連絡事項

一　新型コロナウイルスによる慰霊祭等影響について

本会報にも掲載しましたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、当顕彰会主催の「第41回特攻隊全戦没者慰霊祭」は役員等による縮小した規模での催行となりました。

同じく、各地で行われる予定であった慰霊祭等も同様の状況で、会報1月号でご紹介しております各地での慰霊祭は5月3日までの予定の慰霊祭で、多くが中止または縮小との連絡を受けております。

慰霊祭に参列を予定されて居られる方は、予めご確認の上参列されますようお願い致します。

二　各地の慰霊祭の修正

令和2年度慰霊行事予定（1月号記載分）

⑯　福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭
　5月・（未定）→5月9日（土）

㉖　憂国碑錨地蔵尊御霊祭
　7月15日（水）→7月23日（海の日）

三　会報『特攻』第129号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

令和元年度明野忠魂塔慰霊祭
5頁1段目　右2行
　誤　（三重県伊賀市）
　正　（三重県伊勢市）

第一空挺団研修に参加して
44頁3段目7行目及び
45頁2段目9行目
　誤　「挺進赴難」
　正　「挺身赴難」

45頁1段目右11行
　誤　奥本道郎大尉
　正　奥山道郎大尉

寄付者御芳名（敬称略）
51頁1段目　右1行
　誤　呉　菜々子
　正　呉　奈々子

四　寄付者等の報告

寄付者御芳名（敬称略）

（令和2年1月1日～3月31日）

（単位千円）

二〇〇　中島　省治　一〇〇　田中　襲
一〇〇　呉　奈々子　八〇　山根　秋男
五〇　神原　孝　一〇　天野　文恵
一〇　ファンデルドウース瑠璃
一〇　上西　幸子　一〇　齋須　重一
一〇　竹田　五郎　一〇　市場　敏司
一〇　遠藤　和子　一〇　中溝　昭子
一〇　田辺さだ子　一〇　三好　達
一〇　知覧特攻慰霊顕彰会
一〇　千葉　孝　一〇　粕井　隆
一〇　原島　淳子　一〇　石井　令彦
一〇　菅原　謙吾　一〇　多田　剛
一〇　鈴木　敏博　一〇　浮世　喜昭
一〇　吉田　三郎　一〇　齋須　将
一〇　岩崎　順哉　一〇　鹿子島　孝
一〇　今泉　幸男　一〇　髙須と志江
一〇　遠山三千代　一〇　尾中　信仁
八　椿　孝則　八　降矢　達男
七　近藤　敬子　七　新井　重雄
七　井川　嘉江　七　川田久四郎
七　服部　武志　七　萩原　健一
七　藤元　正明　七　吉田　和貞
七　呉　正男　七　丸原　巧
七　今井　敏　七　早田　亮彦
七　窪田　隆　七　百目鬼　清
七　千　玄室　七　川岸　義視
七　原　照寿　七　酒見　奎一
七　倉田　邦男　七　斉田　孝
七　（公財）千鳥が淵墓苑奉仕会
七　加藤　千佳　七　原田　洋
七　鮫島美知子　七　下森　康玄
七　中村光太郎　七　大坪万里子
七　枡田　恭典　七　藤永　雅彦
七　堂坂　清　七　辻本　浩司
七　小池　末人　七　紺野　真理
七　中熊　真一　七　大澤　和久
七　津田　智世　七　神林　千祥

七 飯田 隆夫
六 加藤 拓
六 宇都宮秀全
五 湯澤 一枝
五 臼田 智子
五 池田 守
五 後藤 昭一
五 曽山 舞
五 深水 彪
四 高橋 芳幸
三 廣田 正
三 東京陸士57期生会
三 古屋 七郎
三 和才 誠
三 飯岡 哲子
三 佐藤 義信
三 松田 栄
三 小坂 宜雄
三 廣川 恭子
三 佐藤 孝二
三 正根 恵二
二 中川 香織
二 ノブレス株式会社
二 東洋物産株式会社
二 國武 統士
二 吉田 治正
二 日高 誠
二 大川 吉昭
二 川井 孝輔

六 堀江 正夫
六 伊藤 元夫
五 高山 友二
五 小林奈美子
五 谷 シゲ子
五 根本 紘一
五 竹本 佳徳
五 明石 英次
四 中山 石
三 七瀬谷重男
三 近藤 博隆
三 清水 典郎
三 古閑カツ子
三 茂木 尚
三 水気 博美
三 久保 慶子
三 芦澤 博之
三 櫻井 建夫
三 西田 邦夫
三 早瀬 登
二 花塚真知子
二 阿部 敏行
二 布施木 昭
二 辻 外文
二 小松 嶺生
二 小森 正明

二 吉村 伊平
二 山口 照夫
二 山本 健雄
二 大林 喜一
二 栗原 巌
二 濱田 秀逸
二 樽井 弘和
二 岩舘 芳雄
二 吉田 文堯
二 藤井 亮一
二 尾関 南山
二 松尾 知男
二 森ノ内敏巳
二 肥田木多恵子
二 島田 正登
二 田崎 鉄男
二 紺谷由喜夫
二 中村 竹雄
二 塚原 正
二 佐藤 一志
二 岩月 仁志
二 土橋 猛
二 菊池 孝
二 中島 尚史
二 安藤 愿英
二 林 佐吉
二 北村菜穂子
二 舘本 勲武
二 牧 重勝

二 渡辺 尚美
二 藤川 忠重
二 矢可部一敏
二 長谷川知幸
二 杉原 清之
二 牧 勝美
二 手塚 巌
二 服部 義隆
二 菊地 昭夫
二 作左部 貢
二 井出 隆夫
二 常井 功子
二 伴野 富夫
二 長瀬 彰孝
二 大瀧 成紀
二 豊岡 昭
二 高須 雪枝
二 岡嵜 幸平
二 平田 重夫
二 石井 敏子
二 川本 修二
二 橋本 亀
二 小野 好永
二 原田里津子
二 早川 文象
二 石田 賢一
二 小松健太郎
二 松本 賢二
二 荒木 秀一

二 村上喜美夫
二 西村 征夫
二 沢田 進
二 山口 久恵
二 田中 臣二
二 宮尾 敏晴
二 中本ゆかり
二 若月 良介
二 安永真理子
二 沖 周治
二 青山智由貴
二 安藤佐智子
二 湯野 隆子
二 山本 寛
二 野本 恒雄
二 小池 典子
二 喜久 忠人
二 中嶋 裕子
二 寺澤 要子
二 東 芳
一 小島 啓三
一 吉野 信二
一 齋藤 忠信
一 小倉 利之
一 石井 光政
一 岩崎 茂
一 大手 良之
一 細谷 清
一 佐多 和仁
一 青木 義博
一 森 實
一 関 亜沙美

一 柄澤 寛之
一 水町 博勝
一 藤田 幸生
一 衣笠 陽雄
一 金子 敬志
一 塚田 征二
一 上田 浩寛
一 村山 公一
一 石垣貴千代
一 渡辺 由佳
一 生峯 和代
一 本 禎亮

新入会員名簿（敬称略）
（令和２年１月１日～１月31日）

宮城　佐藤　憲嗣
茨城　東野　一也
埼玉　吉澤　英夫　谷口　恵
千葉　近藤　明雄
　　田中　襲　山口　尚哉
　　嶋田　早貴　橘　明子
　　七瀬谷重男
東京　原　明穂　森田　茂生
　　坂下　淳子　宮﨑　典郎
　　久納　雄二　中西　哲
神奈川　中村　剛　針生　達也
　　ノブレス株式会社
　　東洋物産株式会社
愛知　唐澤　秀司　江﨑　欣也
岡山　田井　宏幸
広島　ファンデルドウース瑠璃
長崎　浅井　靖子
熊本　荒木　佑未

会員訃報（敬称略）

北海道　田湯　聖禮
東京　天野　高枝（1・7・24）
　　山口　髙治（1・12・3）
　　阿部　長男
山梨　丸茂　高男（1・10・13）
三重　大谷　守（1・1・31）
　　今西　雅夫（2・2・1）
大阪　森田　豊也（1・6）
広島　道土井圭次（1・8）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　３０００円
・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp
　ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５－７
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp